

---

# ツイン・オブ・エスパー

須賀 隆太郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ツイン・オブ・エスパー

### 【Nコード】

N1552B

### 【作者名】

須賀 隆太郎

### 【あらすじ】

小菅裕太と裕美は結構どこにでもいそうな双子の兄妹。しかし、実は彼らには不思議な能力があった。

## 第1章：&1t；化学教師編&gt；プロローグ

とある街のとある家で、朝から誰かが慌てているような声が聞こえてくる。

「おい、起きろ！！裕美！」

どうやら誰かが裕美という少女を起こしているようだ。

「ふにゃ……？裕太……？なあにい〜？」

一応裕美は目を開けたがまだ寝ぼけているようだ。

「なあにい？じゃない！もう8時10分だ！学校遅刻するぞ！」

裕太と呼ばれた少年が慌てているのは、どうやら寝坊して学校に遅れそうだかららしい。その一言で裕美も完全に目を覚ました。

「うっそ！なんでお母さん起こしていつてくれなかつたの!？」

裕美は慌ててベッドから飛び降りながらそう叫ぶ。

「言っただだろ？今日は仕事がたまってるからいつもより早く家を出る、って……だから自分たちで起きてね、って……」

裕太がそう説明すると、

「そういえばそんなこと言っただよような気も……とにかく、着替えるから出てって！」

裕美は納得すると、裕太を部屋から追い出し、制服に着替え始めた。

と、裕美が着替えている間に簡単に自己紹介でもしておくか。オレは小菅<sup>こすげ</sup>裕太<sup>ゆうた</sup>。高校2年生だ。そして、今着替えているものすごい慌てているのが、オレの双子の妹で小菅<sup>こすげ</sup>裕美<sup>ゆみ</sup>だ。今日は親が早く出てったせいで起こしてもらえずそろって寝坊してしまったのだ。

結局、裕美が着替えを終えて準備が完了したのは8時20分だった。ここからオレたちの通う葉山が丘高校までは自転車でもどんなに急いでも20分じゃ着かない。

「仕方ない……アレやるぞ、裕美。」

裕太が裕美にそう話しかけた。

「アレか……疲れるからなるべくならやりたくないけど、このまま行ったら遅刻確定だしなあ……うん、やろう。」

裕美はしぶしぶといった感じだったが、やはり遅刻したくないとの思いで裕太の案に乗った。

「それじゃ、行くぞ……」

「うん……」

二人は中から玄関の鍵を閉めると、手をつなぎ念じた。すると、二人の姿は一瞬にして消え、葉山が丘高校の裏門付近にいた。

そう、裕太たちは不思議な能力がある。

## 第1章：&1t：化学教師編&gtt：プロローグ（後書き）

はい、というわけで新連載です。

今度は双子の兄妹が主人公でしかも超能力者という設定になっています。

次回あたりのあとがきでたまにはまじめにキャラ設定書いてみよう

かなあ……

次回もお楽しみにということで、今回はここまで。

第1章 2：授業と怪しげな化学教師（前書き）

超能力のおかげで学校に間に合った裕太たちだったが……？

## 第1章 2：授業と怪しげな化学教師

裏門付近に一瞬で移動したおかげで、裕太も裕美も遅刻は免れた。しかし、やるまえに裕美が渋ってた理由のとおり、二人とも疲れ果ててHRの間ずっとぐったりしていたのだった。

（はあ…… やっぱ久しぶりにやるとアレは疲れるな……）

裕太が声に出さずにそう思うと、

（そうだね…… ゴメン、裕太。私が寝坊しなければ……）

裕美から返事が返って来た。

二人にはさつき使った「テレポート」のほかに、心で会話する「テレパシー」、そして手を使わずに物を動かす「サイコネシス」の計3つの超能力がある。ただし、テレポートは二人が一緒にいないと使えないし、テレパシーも二人相互間でしか話せない欠点もあった。サイコネシスだけはそれぞれが備えているため、片割れだけでも使える……が、周囲にはこの能力を秘密にしているため、めったなことでは二人とも使わないが。

（まあ、間に合ったからいいけどな……それより授業寝ちゃったら

ノートよろしくな。」

裕太は最後にそう言って裕美との会話を打ち切った。  
（もう、ちゃんとまじめに受けないとダメだよ。ていうか寝たらお仕置きね）」

裕美も最後にそう言って授業の準備を始めた。

その際にふと裕太の方を見ると、かすかに身震いしているのが見えたので、裕美は人知れずくすりと笑うのだった。

裕太は午前中の授業をどうにか気力だけで寝ずに乗り切り、昼休みになった。

裕太、裕美、それと二人の親友のたきりょうへい灌亮平の計3人で食事をとっていたとき、

「なあ、最近化学の中里なかざと、様子がおかしくないか？」

亮平が突如そんなことを二人にたずねた。

「様子がおかしいって、どんな風に？」

裕美が亮平に聞き返す。

「なんかさ、前からだったけどアイツしよっちゅう自分の研究室に閉じこもってるじゃないか？アレの時間がいつそう長くなってるみたいなんだ……何やってるんだらうな……」

亮平はそう話した。

「あ、私それについて噂なら聞いたことあるよ。」

そう言って話に入ってきたのは、クラスメートの一人で、科学部に所属している黒田くろだ 秋子あきこだった。

「あきちゃん……噂って？」

裕美が秋子にたずねる。すると、

「あくまで噂の域を出ないけど、中里先生は最近魔法とか超能力とかに興味を持ったみたいなの。これは複数の科学部員が聞いているから間違いないわ。ただ、ここからが噂なんだけど、その魔法だか超能力だかを調べるためかどうかわからないけど、怪しげな化学実験を繰り返しているらしいわ。その影響で研究室にこもってるらしい、



これが噂の内容よ。」

秋子はそう話した。

(超能力を調べてるだと……？オレたちは大丈夫かな……？)

裕太はテレパシーで裕美に話しかける。

(さあ……私たちの“秘密”はバレてないはずだから大丈夫だとは思うけど……もしバレたら怖いわね……アイツってなんかマッドサイエンティストっぽいし。)

裕美はそう答えた。

結局その場では中里がなにやってるのかわからないまま昼休みが終わった。

「あ、次の時間ちようどアイツの化学じゃん。聞いてみるか。」

裕太はそう言うと、あくびをしながら授業の準備を始めた。

授業が始まり、中里が入ってきた。と、そこにタイミングよく、「先生、最近なんか面白いことでもあったの？なんか顔がにやけるよ?」

秋子がそう切り出した。

「え、そうだったか? いや、大したことじゃないが、最近の研究が面白くてな。今日も危なく授業忘れるところだったよ。」

中里はそう返した。

「授業忘れるほどって……何を調べてるんですか?」

また秋子がたずねる。

「ふむ。キミたちは超能力とかを信じるかな? 化学の教師をやってる私が言うセルフじゃないが、この世界には科学だけじゃ解明できない謎が多く存在しているんだ。それを解明できたらすごいと思わないかい?」

中里はそう答えた。

(やっぱ超能力か……裕美、こいつの前で秘密がバレることがないようにしないとな。でないと大変なことになるぞ)

裕太は裕美にテレパシーで注意を促す。

(わかってる。っていつかなんか先生私たちのほうを見てない?)  
裕美が視線を感じたのか、中里のほうを見ると、中里はあわてて視線をそらした。

授業の頭から妙な話をされたせいでクラスの大半がやる気をなくし、裕太を含めて半分以上が居眠りしていた。

(裕太、起きなよ。居眠りしたらお仕置きだつて言ったよね?)

裕美はテレパシーで裕太を起こそうとするが、完全に爆睡してる裕太は起きる気配がなかった。

(ほお)……起きないなら……こうするまでよ)

裕美はテレパシーで最後の警告を送ると、集中し、能力を開放した。<sup>チカラ</sup>すると、裕太の机とイスが勢いよく横にずれ、裕太は床に落ちた。

「いつてえ……」

裕太は何が起きたのかわからないといった感じで起き上がると、机とイスを戻して座りなおした。

「おい、小菅兄、大丈夫か?寝ぼけてイスから落ちるなんて……ていつか授業中に寝るんじゃないぞ。」

中里はそう注意した。

「あゝはい、すみません。」

裕太はとりあえず謝ったあと、

(裕美、今のお前だな?なんてことするんだよ!?)

裕太がテレパシーで怒鳴ると、

(言ったでしょ、寝たらお仕置きだつて。それを実行したまでよ。)  
裕美は悪びれる様子もなく言つてのける。

(確かに寝ていたのは悪いと思うが、よりによって中里の前で能力<sup>チカラ</sup>を使うなよ。とりあえずオレが寝ぼけて落ちたと思つてくれるが……これでバレたらお前のせいだぞ……)

裕太はそう言った。

(あ……たしかに中里の前はまずかつたわね。裕太、ごめん。)

裕美はようやく事の重大さに気づき、裕太に謝った。と、そのとき。

「……げ！……すげ！……小菅兄！聞いてるのか！？」

裕美との会話に集中していたせいで中里が裕太を呼んでいるのに気づいていなかった。

「あつ、すんません、ボーっとしてました……」

裕太があわてて返事すると、

「寝てた罰だ。この問題解いてみる。」

中里は裕太にそう命じた。

「はい……」

裕太はめんどくさそうに前へ出ると、あつという間に問題を解いた。

「せ、正解だ……まったく、もう寝てるんじゃないぞ。」

中里はどうかやら裕太が解けないと思っていたらしく、あっさり解かれて驚いていた。

「それでは、今日はここまで。」

授業を終え、HRもあつという間に終わった。

「よし、裕美、帰ろうぜ。」

裕太が裕美の席まで言っそう話しかける。

「うん、ちょっと待ってて。」

裕美はそう言っつと、教科書などをカバンにつめて、立ち上がり、教室を出た。

（なんか歩くのかったるい……アレ使わない？）

裕美が校門を出たところでそう切り出した。

（ああ、オレはかまわないぞ。それじゃ、裏門の向こうの山でやるか。）

裕太はそう言っつて裕美とともに方向を変えた。

学校の裏山に入って近くに人がいないことを確認すると、二人は手をつなぎ、レポートでその場から消えた。

しかし、二人は気づいていなかった。その場所は学校のとある部屋からまる見えだということに……

「い、今のはいったいなんだ？ わずかに見えたのは小菅兄妹……だったよな…… ちょっと調べて見る必要があるかもしれない……」

自分の研究室の窓際で実験の準備をしていた中里が一部とはいえ目撃してしまったのだった。

## 第1章 2：授業と怪しげな化学教師（後書き）

よりによってまずい人物に目撃されてしまった……この先中里は何かしかけてくるのか？

おまけ

前回のあとがきで予告したとおりキャラ設定

こすげゆうた  
小菅裕太

主人公A。裕美と双子の兄妹。一応裕太が兄ということになっている。超能力者。

能力：テレポート、テレパシー（裕美と二人でしか使えない）サイコキネシス（単独で使用可能）

こすげゆみ  
小菅裕美

主人公B。裕太の双子の妹。裕太と同じく超能力者。

能力：裕太と同じ

たきりようへい  
瀧亮平

裕太たちのクラスメイトで親友。しかし、裕太たちの能力については知らない。

くろしたあきこ  
黒田秋子

裕太たちのクラスメイト。科学部員。しかし、担当が中里になつてからやる気をなくしている。

なかざとかつのり  
中里勝紀

葉山が丘高校化学教師。超能力に興味を持ち、そのせいか最近マッドサイエンティストとなりつつある。

### 第1章 3：見られた？バレた？ごまかせ！

翌日、裕太たちがいつものように登校し、朝のHRが終わった直後、突然放送が入った。

『2年3組、小菅裕太と小菅裕美、職員室まで来るように。繰り返し……』

放送は中里の声だった。

「なんだろうな……とりあえず行ってみるか。」

裕太がそう言い、二人は職員室へ向かった。

「失礼します。小菅ですけど、何の用ですか？」

裕太はドアを開けながらそう言うのと、

「ああ、呼んだのは私だ。」

放送の声のとおり、中里が出てきた。

「それで、中里先生？私たちになんか話でも？」

裕美がそうたずねる。

「すまないが、ちょっと来てくれないか？」

中里はそう言うのと二人を連れて化学実験室へ向かった。

化学実験室に着くと、

「なあ、小菅。昨日私がした話を覚えてるか？」

と切りだした。

「昨日？超能力がどうこう言ってたアレのことですか？」

そう聞き返すと、

「そうだ。そこで本題だが、小菅、昨日の放課後学校の裏山にいなかったか？」

中里がそうたずねると、

「その超能力の話と質問のつながりがよくわからないのですが、なんなんですか？」

裕美が答えずに聞き返すと、

「いや、昨日の放課後、研究室で仕事をしていたら、キミたちに似た生徒が裏山に入っていくのが見えたんだが、あんなところで何をやってたのか気になってな。しかも入った直後に姿が見えなくなり私が帰る時間まで出てこなかった。いったいあんなところで何をしていたんだ？」

中里は裕太たちにそうたずねた。

（まずいな……あの部屋から丸見えだったのか……裕美、どうする？）

裕太がテレパシーで裕美に相談する。

（ごまかすしかないでしょ。ここは私にまかせて。）

裕美はそう答え、

「昨日の放課後はたしかに裏山に行きましたけど、天気がいいので散歩に行っただけです。それに、少しだけいてすぐ帰りましたよ？先生が何時まで学校にいたかは知りませんが、明るいうちに家に着きましたよ。ねえ、裕太？」

裕美はそう説明し、

「裕美の言うとおりです。なんだったら親に電話したってかまいませんよ。ちょうど日が暮れるところに親が帰ってきましたけど、そのときには僕らはちゃんと家に帰っていたんですから。」

裕太もそう補足した。

「ふーむ……それならいいんだ。変なこと聞いてすまなかったな。もう戻っていいぞ。」

中里はまだ納得いかない様子だったが、これ以上の追求は無駄と判断したのか裕太たちを解放した。

教室に戻りながら、

（ふう、危なかったね〜）

裕美がそう話しかける。もちろんテレパシーで。

（ああ……裏山でやるのも危ないかもな。もっと人目につかないところ探さないといけないな。それとさっきの説明なかなかよかったぞ。サンキューな。）

裕太がそう答え、ついでに裕美をねぎらう。

教室に戻るころにはとくに授業が始まっていたが、教師側も裕太たちが呼び出されていたことは知っていたので、遅刻も特に何も言われなかった。

昼休み、昨日と同じメンツで昼飯を食っていると、

「なあ、朝から中里に呼び出されてたが、なんだったんだ？」

亮平が裕太たちにそうたずねた。

「ん、ああ……たいしたことじゃなかったよ。昨日帰りに散歩しようとして裏山に入ったのを見られて、何やってたのか聞かれただけ。」  
裕太はそう説明した。

「へえ、でも中里はなんでそんなことを聞いたんだろっな？」

亮平は不思議そうな顔をして聞いてみた。

「さあ？話の最初に昨日の超能力の話がどうこう言ってたけど、やっぱりよくわからないや。」

裕美はそう言っ肩をすくめた。

一方、自分の研究室にこもったままの中里は――

「くそっ、絶対怪しい。あれは絶対小菅だった。裏山の中で手をつないだと思ったら直後に姿が消えた。あれは私の文献によればテレポートという超能力……だとすれば小菅は超能力者ということに……ふふふ……面白くなってきたぞ。必ず秘密を暴いてやる。覚悟しておけ、小菅……」

研究室のある特別教室棟から中里の不気味な声が響いていることを裕太たちは知る由もなかった。



第1章 3：見られた？バレた？ごまかせ！（後書き）

どうにかごまかしたがこれで納得したとは思えない。  
裕太たちと中里は今後どうなる？

**第1章 4：掃除当番と中里の企み？（前書き）**

中里に対してごまかしはどのまで通じるのか？

## 第1章 4：掃除当番と中里の企み？

放課後、裕太たちは掃除当番だったので担当の場所を見ると、運悪く化学実験室だった。

「あそこの掃除かつたりいんだよな……」

裕太が愚痴をこぼすと、

「でも、行かないとね。」

裕美が裕太の背中を押して教室を出て行った。

化学実験室へ行く途中で、

（私だってホントはあそこの掃除いやだよ。担当も中里だしさ。アイツ絶対私たちのこと疑ってるよ。）

結局裕美もテレパシーで愚痴をこぼしていた。

（ああ……ホントそっちも面倒だな……しばらくはより警戒したほうがいいだろうな。当分の間何もなければ諦めるだろ。）

裕太が希望的観測を伝えたところで、裕太たちの班は化学実験室に着いた。

「ほう、今日の掃除当番は小菅たちか……」

中里が小さな声でそうつぶやいたのを二人は聞き逃さなかった。

「先生？聞こえてますけど、私たちにまだ何かご用でも？」

裕美が強気に打って出る。

「いや、なんでもない。さあ、さっさと掃除を済ませるんだ。」

中里は首をふるると、そう指示を出した。

「よし、OKだ。ご苦労だったな、もう終わりでもいいぞ。」

中里が掃除終了のチェックを済ませ、裕太たちは化学実験室を出て教室に戻り、帰り支度をして学校を出た。

（今日はさすがにアレはやめといたほうがいいよね？）

裕美が裕太にそう話しかける。

(そうだな。昨日の一件で近くに人がいなくても油断はできないってわかったからな。)

裕太はそう答え、二人で歩いていった。

しばらく歩いて、もう少しで家に着く、そのとき。

(ん？裕美、なんかオレたちを尾行してるやつがいらないか？)

裕太が妙な気配に気づき、裕美に話しかけた。

(やっぱり裕太も気づいた？私もさっきからそんな気配が……)

裕美はそう言いながらそつと後ろを見ると、人影は電柱の陰に隠れたが、一瞬の差で裕美たちには相手の顔が見えた。

(あれは……中里！？なんでアイツがこんなところに？しかもビデオカメラなんか持ってるよ？)

裕太たちの後をつけてきていたのは、中里だった。

(まさかアイツ、オレたちの後をつけていれば決定的瞬間が撮れると思ってるのか……？)

裕太があきれながらそうつぶやく。

(で、どうする？中里のやつ、まだ気づかれてないと思ってるみたいだけど……)

裕美もあきれながら裕太にたずねる。

(ま、この場合オレたちが取れる選択肢は2つ。ひとつは後ろにいる中里を見つけて何やってるのか問い詰める、もうひとつはこの角曲がったところでテレポートして逃げる。どっちにする？)

裕太が2択で裕美にたずねる。

(今日のところは面倒だし、逃げる方向で)

裕美がそう答えると同時に、二人は走り出した。それを見て人影も電柱の陰から飛び出し、追いかけ始めるが、二人は角を曲がると同時にテレポートしたため、そのあとは見つけられるはずも無く、中里は裕太たちを見失ったことに対して悔しそうな表情で立ち去った。

研究室に戻ってきた中里は

「あの道は結構細かい路地が入り組んでいるとはいえ、そう簡単に見失うとは思えん……ならば、これを使うか……」

中里は独り言をつぶやくと、なにか作り始めた。

「ククク……完成だ。これできつとアイツらの正体を見破ることができるはず……」

今日も放課後に中里の不気味な笑い声が響くのだった。

同時刻、小菅家。

「へつくしゅん!!」

裕太と裕美、同時にくしゃみをした。

「誰かオレたちのうわさでもしてるのか？」

裕太が鼻をすすりながらつぶやくと、

「そんなの、中里くらいいしくないんじゃない？なんか嫌な予感があるのよね……」

裕美も鼻をすすりながら話す。

「とにかく、アイツをなんとかしないとオレたちの平和な生活は守れないな。もし仮に決定的瞬間をビデオに撮られたとしてもカメラを破壊すれば問題は無いよな。とにかく、アイツが何か仕掛けてきてもオレが守る。」

裕太はそう決意をあらわにした。

## 第1章 4：掃除当番と中里の企み？（後書き）

ついに中里は犯罪スレスレストーカーまがいのことまで仕掛けてきた！？

裕太たちはどうするのか？

第1章 5：中里 vs 小菅兄妹、開幕（前書き）

中里が諦めるのが先か、裕太たちの秘密が暴かれるのが先か……

## 第1章 5：中里 vs 小菅兄妹、開幕

翌日、二人はいつもの時間に登校し、現国の時間に居眠りした裕太に裕美がサイコキネシスで制裁を加えたりとかちよつとした騒動はあったが、化学の授業が無いおかげで中里とも会うことは無く、無事(?) 昼休みになった。

「さーて、メシだな。裕美、亮平、食おうぜ。」

裕太が二人を誘って弁当を食べ始めようとした、そのとき。

『2年3組、小菅裕太、小菅裕美の両名は中里先生が呼んでいるので化学実験室まで来るように。繰り返す……』

呼び出しの放送が入った。

「また？ 今度は何だつてんだ？」

亮平が一人残されることにぶつぶつ言っていた。

(嫌な予感がするが、行くしか無いよな。大丈夫、いざとなりや力メラさえ破壊すれば……)

裕太が嫌そうにしながらも弁当をしまつて教室を出て行ったので、裕美もあわてて弁当のふたを閉めて追いかけた。

「中里先生、小菅ですけど、今度はなんですか？」

そう言いながら化学実験室に入った二人は、部屋の中央にいた中里にそうたずねた。

「ずばり単刀直入に聞こう。小菅、キミたちは超能力者じゃないか？」

中里が核心をつく質問を不意打ちで仕掛けてきた。あまりに突然すぎて、二人ともしばらくあ然としていたが、

「ぶぶつ……あはははははは!!」

裕美がいきなり笑い出した。

「小菅妹、何がおかしい？」

中里がそうたずねると、



「だって、先生いい歳して超能力とか本気で信じてるんだもん。私たちの年齢でももう信じてる人なんていないよ。これは笑わずにはいられないって……あはははは!!」

裕美は裕太が見る限り本気で笑っていた。

「そーそー、そんな下らないこと確かめるために先生はわざわざオレたちを呼び出したんですか？用事はそれだけなら戻りますよ。昼飯の途中だったんですから。」

裕太は呆れた表情でそう言うと、実験室を出て行った。

後に残された中里は

「くっ……絶対正体を暴いてやる……そのためにはもっと確実な動かぬ証拠を掴まなくてはな……」

悔しそうな表情でそうつぶやくのだった。

裕太たちが教室に戻ると、

「お、戻ってきたな。今度はなんだった？」

亮平が話しかけてきた。

「それがさ、聞いてくれよ。中里のヤツ、オレたちが超能力者じゃないかとか言い放ったんだぜ。」

裕太が笑いながら亮平にさっきのことを話した。

「マジかよ!？そんなことのためだけに呼び出したのか？アホくせー!」

亮平を含めそれを聞いていたクラスメイト全員爆笑の渦に包まれた。

「ま、災難だったな。あと少ししか時間無いけどメシ食べば？」

亮平がそう言ったので二人が時間を確認すると、昼休みもあと5分しか残っていなかった。二人は急いで食べ始めたが、さすがに5分じゃ食べきれずも無く、半分ほど食ったところでチャイムが鳴った。

授業の合間に残りの弁当を食べ、放課後までにはなんとか弁当を食べきった二人だった。

「さて、今日は掃除当番でも無いし、さっさと帰るか。」

裕太が裕美を誘って帰ろうとしたとき、化学実験室に掃除に行っていた班が妙に早く帰ってきた。

「あれ？ずいぶん早いな。もう実験室の掃除終わったのか？」

裕太がその班の一人にたずねると、

「いや、実験室に行ったら、ドアに張り紙がしてあって、『今日はやることがあつて忙しく、監督できないので掃除はしなくてよし』って書いてあつたからすぐ戻ってきたんだ。ホントアイツって何してるんだろっな？」

との答えが返って来た。

「そっか。それじゃ、オレたちは帰るな。じゃな、また明日。」

裕太たちはそう言って教室を出て行った。

(中里のヤツ……掃除さえほっぽりだしていったい何をやってるんだろっな……)

裕太がテレパシーで裕美に話しかける。

(まだ私たちのこと疑ってるんだろっね、きっと……っていうか今日もつけてきてるし。まさか私たちが学校を出るのを確認するために掃除をなしにしたんじゃ……)

裕美が今日も後ろに中里がいるのを確認し、深いため息をついた。(あつちがそのつもりならこつちも証拠をつかんで校長にチクつてやるっじゃないか。こんなこともあるっかとカバンにカメラ入れといてよかったぜ。)

裕太はそう言うのと、カバンからデジカメを取り出し、歩いているときに突然後ろを振り向き、不意打ちのような感じで後ろからついてきてる中里を撮影した。

「ちっ！気づかれたか！」

中里は舌打ちすると、来た道を引き返していった。

「やったぜ、大成功！」

中里が見えなくなつたところで、裕太と裕美はハイタッチで喜び、帰宅した。

翌日、裕太たちは朝登校したあとすぐ校長室へ出向き、中里にストーリーカーまがいのことをされていると報告した。

「ふむ。わかった。本人に聞き取り調査をして処分をしておこう。まったく、生徒に対してストーリーカー行為を働くとは……」

校長はそう言うと、裕太たちにもう戻っていいと告げた。

「失礼しました。」

裕太たちはそのまま教室へ戻り、授業を受けたのだった。

一方、その後の校長室では

「さて、中里くん。生徒からこんな写真とともに君にストーリーカーまがいのことをされていると通報があつたのだが、何か弁明はあるかね？」

校長は中里を呼び出し、さっき裕太から渡された写真を見せた。  
「待つてください、私は断じてストーリーカーなどやっておりません。たしかに小菅という生徒の後をついていたりしたことはありますが、それはちよつと確認したいことがあつたわけでした……」

中里はそう弁明した。

「バカモン！それをストーリーカー行為というのだ！君のその行為が生徒に恐怖感を与えているのだぞ！そこまでして確認したかつたこととはなんだね？言ってみたまえ！」

校長はすごい剣幕で中里を怒鳴った。

「そ、それは……」

中里はそれつきりなにも言えなくなつてしまった。

「言えない事なのかね？もういい、十分だ。君は向こう3ヶ月減給30%だ。今後一切ストーリーカー行為など働くんじゃないぞ。それで

は、戻っていい。」

校長は最後に処分を下すと、中里を仕事に戻らせた。

研究室に戻った中里は……

「ちくしょう！これも全て小菅が正体を見せないせいだ！アイツらの秘密を暴いて学会に発表すれば校長さえも黙らせられるのに！」

元々自分がストーリーカー行為をしていたのが悪いはずなのに、責任転嫁して自らは悪くないと思いついでいるのであった。

第1章 5：中里 vs 小菅兄妹、開幕（後書き）

校長を味方につけ中里のストーカー行為をやめさせることに成功した裕太たち。

このまま黙ってるとは思えない中里の次の手はなんだろう？

## 第1章 6：亮平の極秘侵入計画と告白

昼休み、裕太、裕美、亮平のいつものメンツで弁当を食べていると、

「……………みないか？」

亮平が何か言っていたようだ。

「え？亮平、今何か言ったか？」

裕太が聞き返すと、

「なんだよ、聞いてなかったのか？だから、今度の週末にアイツの研究室に忍び込んでみないか？って言ったんだよ。」

亮平はもう一度説明した。

「そんなことして大丈夫かな？一応生徒の立ち入りは一切禁止ですよ？研究室って。」

裕美が心配そうにたずねる。

「でもよ、しょっちゅう呼び出されていい加減嫌気が差すだろ？それだったらこっちから仕掛けて、逆になにかアイツの弱みを握ろうってことだ。幸いオレの仕入れた情報だとヤツは土曜日なら出張で学校にいないからな。そしてさらにいいことにヤツの研究室の窓の鍵は外から見た限り壊れていて直る様子はない。絶好のチャンスじゃないか？唯一大変な点があるとすれば、ヤツの研究室が3Fにあるってことだ。ま、3Fならよじ登れないことはないしな。」

亮平はどうやら裕太たちのことを思っただけ提案したらしい。

「裕美、どうする？オレは亮平の提案に乗るつもりだが……………別に一緒に来なくてもかまわない。」

裕太がそう言っただけ裕美のほうを見る。

「裕太が行くんだしたら私も行くよ。私と裕太は双子なんだから二人で一人なんだからね。」

裕美は笑顔でそう裕太に言った。

「よし、決まりだな。ところで、全然関係ないんだが……………裕太たち

って、どっちが兄とか姉とかあるのか？」

亮平がふとそんなことを聞いてきた。

「一応、オレが兄で、裕美が妹ってことになってる。もっとも、双子だから大して変わらないけどな。」

裕太はそう説明した。

「そっか……裕太、いや、兄貴！裕美ちゃんをオレにくれ！今の笑顔はかわいすぎてもうノックアウトされちゃった！！」

亮平は納得したような顔をしたと思ったら、突然裕太の手を握りそんな爆弾発言を繰り出した。

「……………は？」

あまりに突然の話題の変わりように妹をくれといわれた裕太、そしてその当事者の裕美も目が点になっていた。

「亮平、今なんて言った？」

放心状態からやっと戻ってきた裕太が聞き返すと、

「一緒のクラスになったときからかわいいなと思って気になってたが、今の笑顔一発で限界超えたわ。オレは裕美ちゃんのが好きだ。兄貴、もう一度言うが、裕美ちゃんをオレにくれ！」

亮平はさつきより詳しく、もう一度宣言した。

「だってさ、裕美。どうする？オレは何も言わん。本人の意志に任せるよ。双子だから兄貴面するつもりもないしな。」

裕太はそう言って裕美のほうを見る。

「え〜！？突然そんな事言われても困るよお……………しばらく考えさせてもらっていいかな？」

裕美は答えを出さず、少し待ってと亮平に告げるのだった。

「ああ、オレとしても今のは突然すぎたかな。いいよ、いくらでも

待つよ。」

亮平もいきなり告白したことを反省したのか、待つことを快く了承した。

とりあえず落ち着いたので、改めて週末の作戦を立てることにした3人。

「中里のヤツは土曜の朝から出張っていう情報だ。朝9時に校門に集合、でいいか？」

亮平がそう二人にたずねると、

「それはいいけど、その出張から戻るのはいつかわかるの？探索中に帰ってきて鉢合わせなんて事になったら大変だよ？」

裕美が慎重な意見を出した。

「一応予定では土曜の夜になってるからそれから学校に来るということはないだろう。ただ、アイツ自身はいなくてもなにかトラップとか仕掛けてそうで怖いんだよな。あまりに無防備なのが逆に怪しいっていう見方もできる。それと、数日前の放課後に実験室から中里の不気味な声が聞こえてきたって言う情報もある。」

亮平が事前に調査したことを手帳を見ながら話す。

「そうか、まあなんとかなるだろ。それじゃあ、土曜の朝9時、校門で集合。それでいいんだな？」

裕太が再度確認すると、亮平は頷いた。と、そこで昼休み終了のチャイムが鳴った。

午後の授業は、予定が変わっていて、裕太たちにとっては運悪く化学2時間だった。

（なんで化学を2時間続けてやらなくちゃいけないのか……誰かの陰謀を感じるぜ……）

裕太がうんざりした表情で裕美にテレパシーで愚痴った。

（正直私は化学の授業どころじゃないわ。まさか亮平くんが私のこと好きだなんて……嫌いじゃないんだけど、付き合うとなると秘密



を守るのが大変よね…… どうしたらいいんだろ？ねえ、裕太（？）  
裕美は裕美で授業聞かずにさっきのことを考え、裕太に相談して  
いた。

二人して授業そっちのけでテレパシーで会話していた、そのとき。  
「こらっ！！W小菅、聞いてたか！？」

中里が注意する声で二人はようやく授業中だということを思い出  
した。

「すみません、またボーっとしてました。」

二人は素直に非を認め、謝った。

「まったく、今は次の時間に行く実験の説明をしてるんだから、ち  
ゃんと聞いてないとケガするぞ。」

中里はそう注意すると、再び説明に戻った。

無事に実験の授業を終え、放課後になった。

「さすがに今日はいないな。どうやら校長先生がきつく注意してく  
れたみたいだな。」

裕太が後ろを見て中里がいないのを確認すると、ほっとしたよう  
にそつつぶやいた。

一方、そのころの中里は

「よし、これで取り付け完了だな。これでうまくいくかどうかはわ  
からないが最近私の行動を怪しんでいる生徒がいるようだからな…  
…このくらいはしておかないと安心して出張に行けやしない。窓の  
鍵は修理が間に合わないな。まあ、ここは3Fだから大丈夫だろう。」

中里が研究室に設置していたのは、自作の隠しカメラだった。

そう、前々回で中里が作っていたのは、隠しカメラだったの  
だ。

「ぶむ。これだけ設置しておけばっちり撮影できるな。死角は…

…よし、無いな。さて、どんなネズミがかかるかな………？」  
中里は部屋のあちこちにカメラを設置して不敵に笑うのだった。

## 第1章 6：亮平の極秘侵入計画と告白（後書き）

さて、研究室に侵入することを決意した裕太たち。そこで何か見つかるのか？そしてそれを知らないながらも警戒してカメラなんぞ設置してる中里。この冷戦の行方は？

次回はいよいよ侵入！

## 第1章 7：週末・侵入作戦決行！ピンチ！？

そして、約束の週末が来た。だが  
「やつべ、寝坊した〜〜っ！？」

現在時刻、朝8時55分。すぐに裕美を起こしたが、その時点で時刻は9時を回ってしまった。

すぐに亮平にメールすると、

「わかった。急いできてくれ。ただ、オレは先に侵入を試みる。後から合流してくれ。」

との答えが返ってきた。

「よし、急いで向かうぞ。もちろん、アレでな。」

裕太がそう裕美に声をかけるころには、裕美の支度も終わっていて、二人は学校の裏門までテレポートで向かった。

そのころ、亮平は……

「裕太たちが来るまで少し時間がかかるかな。あいつらが来る前に侵入を済ませて中から鍵を開けておいてやるか。」

そう独り言をつぶやくと、研究室がある校舎の裏側へ回りこみ、壁をよじ登り始めた。

学校の裏門付近に到着した裕太たちは、裏門から学校に入ると、すぐに壁をよじ登っている亮平を発見した。

「あれは下手に声をかけるとバランス崩しかねないな……安定するまでここから見ているか。」

裕太はそう言うと、裕美と共に裏門の脇にある自転車置き場の柱に寄りかかって様子を見ることにした。

しばらく様子を見ていた裕太たちは、亮平が2階と3階の間のひさしに到着したのを見て、

「亮平、すまない。遅くなった。」

下からその声をかけた。

「おっ、やっと来たか。あと少しで侵入して中から鍵を開けるから待つてる。って、このひさし、壊れそうだな……」

亮平はそう言うと、ジャンプして懸垂の要領で研究室の窓枠に手をかけた。と、その直後。

「なんだ、この部屋は……！？って、しまった……！」

亮平は手をかけて研究室の中をのぞきこんだ後、突然手を滑らせ、窓枠に宙吊り状態になってしまった。

「亮平！」

裕太はそう叫ぶ。

「くっ……下にあるひさしはオレの体重を支えるだけの強度はもう残ってない。このままじゃ、落ちる……」

亮平は必死に窓枠につかまりながら、そうつぶやくのがやっとだった。

（私たちの能力を使えば亮平くんを助けられるけど……でも、それは……）

裕美は亮平を助けるか秘密を守るかで心が揺れているようだった。

「亮平、少しだけ待つてる！今誰か呼んでくる！」

裕太は亮平にそう叫び、

（裕美、少しの間でいい、能力で亮平を支えていてやれ。バレない程度にな。）

裕美にそう伝え、一人グラウンドのほうへ駆けていった。

「亮平くん、がんばって……！」

裕美は裕太に言われたとおり、わずかにサイコキネシスを使って亮平を支え始めた。

一方、裕太はグラウンドに出ると、練習していたサッカー部の一人

に、

「緊急事態だ。顧問の先生はいるか？」

できるだけ冷静にそうたずねた。

「先生なら今日はいないよ。全校の先生が今日は出張だって言うてたから。だからオレたちも自主練だし。」

との答えが返ってきた。どうやら今日は中里だけでなく全教師が出張に行っていて誰もいないらしい。

「そうか、わかった。ありがとう。」

裕太はそう礼を言っていると、最後の手段を使うため、再び校舎裏へ走っていった。

そのころの亮平と裕美は……

「くっ、裕太が走っていったようだが、今日は誰もいない日だったはず……チャンスだったのにドジを踏むとは……」

亮平はだんだん弱まりつつある握力で窓枠にしがみついていた。

（このままじゃ私の能力だけでは支えきれないよ……裕太、どうするの……？）

裕美も能力で亮平を支えていたが、裕美がやっているのは亮平がしがみついているのをわずかに支えているだけなので、亮平が落ちれば意味が無いものだった。

そこへ、裕太が戻ってきた。

「ダメだ……今日は全教師が出張とかで誰もいないみたいだ。裕美、校舎の中へ行くぞ。もしかしたら研究室の合鍵くらいあるかも知れん。」

裕太は亮平を救うため、裕美と共に校舎の中 鍵のありそうな職員室へと向かった。

「くそっ！鍵はないか！このままじゃ亮平が危ないってのに……」  
裕太は職員室のドアを拳で殴りながらそう叫ぶ。

「裕太……もう、アレをやるしかないよ……亮平くんも限界が近いはず。迷ってる時間はもうないよ。」

裕美がそんな裕太に自らの決意を伝える。

「裕美……そうだな。アイツならきつと秘密を守ってくれるよな。

よし、やるぞ、裕美！」

裕太も決意を固め、二人は周囲に人がいないことを確認し、研究室の中へテレポートした。

「こ、この部屋は……まずいことになったな……」

研究室に入り窓に向かうだけでも、多数の監視カメラが作動していたのだ。

「とりあえず、今は亮平くんを助けなくちゃ！」

裕美は窓を開け放つと、亮平の腕をつかんだ。

「裕美ちゃん……うまく入れたんだな。助かったぜ……」

亮平がそう言ったところで裕太ももう片方の腕をつかんで、二人がかりで亮平を研究室の中へ引つ張りあげた。

落ち着くまで少し時間がかかったが、どうにか無事に研究室に侵入することができた。

「しかし、入れたはいいが、これはかなりまずいな……」

裕太があたりを見回しながらそうつぶやく。その視線の先には動き続ける多数の監視カメラがあった。

「1台や2台ならありえる話だけど、まさか確認できるだけで15台もあるなんて……」

裕美も呆れたように周囲を見回した。

「ところで、二人はどうやって部屋に入ってオレを助けてくれたんだ？見たところドアをぶち破ったわけでも無いし、鍵は閉まってるし……助けられる直前にわずかに見えたのは何も無いところから突然現れた裕太たちだったんだが……あれは？」

亮平が裕太たちにそうたずねると、二人の表情が固まった。

「そのことなんだが、亮平。見られた以上説明しないとならないよな。けどどひとつだけ約束して欲しい。オレたちは今まで親友の前にも言えなかった重大な秘密を抱えてる。それを今から話すんだが、他のヤツには黙っていて欲しいんだ。」

裕太が亮平に頭を下げて頼み込む。

「なんだかよくわからないけど、言うなって言うのならオレは何も言わない。だけど、そんな重大な秘密なら、まずはあのカメラをなんとかしたほうがいいんじゃないか？」

亮平は頷いたが、ふと気づいたように裕太たちにカメラのことを言った。

「そついやそうだな。思い出させてくれてサンキューな、亮平。」

裕太はそう言うと、裕美や亮平と協力してカメラの録画を停止し、テープを片っ端から抜き取っていった。

「それじゃ、これでOKだな。それで、亮平、オレたちが秘密にしていたことはな……」

裕太は最後にもう一度部屋を見回すと、亮平に秘密にしていた超能力のことを話し始めた。



第1章 7：週末・侵入作戦決行！ピンチ！？（後書き）

秘密をばらしてまで亮平を救った裕太たち。

しかしそこまですて侵入したのに中里の弱味につながりそうなもの  
は見つかりそうにない……？

そして秘密を知った亮平はどうするのか？

第1章 8：探索、そして撤退（前書き）

亮平に秘密を話す決心をした裕太たちは……  
それを知った亮平はどうする？

## 第1章 8：探索、そして撤退

「ちょ、超能力者？中里が興味をもって調べているっていう、あの超能力者？裕太たちが？」

亮平は裕太から話を聞いたものの、いまいち信じていない感じだった。

「そう。でも普通はこんなの信じるわけないし、あれこれ聞かれるのはめんどくさいから誰にも話さなかつただけだね。」

裕美は舌を出して笑うと、とりあえず近くにあったビデオテープをサイコキネシスで浮かせた。

「うお、本当だ。でも、普段は隠してるんだろ？それがなんで中里に気づかれたんだ？」

亮平は目の前で能力を見せられ、やっと信じたが、ふと気づいたことを聞いてみた。

「それが運悪くたまたま能力を使ったところの一部を見られたらしくてな……完全に見たわけじゃないから確証がないにもかかわらずオレたちを追い回す日々だ。こないだストーリーカーまがいのことをされてるって校長に訴えたら注意してくれたのかすぐなくなっただけだな。」

裕太はそう説明した。

「なるほど……でもこれで最近呼び出しが多かった理由が繋がったぜ。でも、これだけ重大な秘密をオレを助けるために使ってくれるなんてな……ありがとう、裕太、裕美ちゃん。」

亮平はわずかに涙を流してそう言った。

3人は部屋の探索を始めたが

「それにしても、まさかアイツにこんな趣味があったなんて……でもこれじゃアイツを黙らせるには弱いかな……」

部屋の本棚にある本を見て裕太が苦笑しつつも、冷静に考えて中里を脅すネタには弱いと判断した。

本棚には、魔法やら超能力について描かれた小難しそうな本からそれに関するマンガ、小説などが大量に収まっていた。

「興味あるのはわかるけど、でもだからって少女マンガはどうかと思っよね〜。」

裕美もやはり苦笑するしかないようだった。

「しっかし……苦労して侵入した割にはアイツの弱味になりそうなものはマンガだけか……仕方ない、撤収だな。」

裕太がそう言って、ドアの鍵を開けようとしたとき。

「裕太、ちよつと待った。」

亮平が後ろから声をかけた。

「ん？どうかしたか、亮平？」

裕太がドアに手をかけようとした状態で振り向いてたずねる。

「いや……足音が聞こえないか？しかも、こっちに近づいてくる……」

…

亮平がそう言ったので、裕太と裕美も耳をすませてみると……

タッタッタッタッタッタッタッタ……

誰かが足早に研究室に近づいていた。この部屋は特別教室棟3Fの突き当たりにあつて、しかも結構広い部屋なため、近くには他の部屋の入り口はなく、ある程度近づけばこの部屋に用があるということがわかるらしいことを前に中里自身が言っていた記憶があつた。

「ま、まずい！脱出だ！」

裕太が小声でそう言って窓際へ移動したが、

「裕太、窓は使えない。さっきオレが侵入するとき足場のひさしが壊れた。だけどこのままじゃまずいぞ……！」

亮平が裕太を止める間にも足音は確実に研究室に近づいていた。

「仕方ねえ、裕美、行くぞ！亮平、しっかりつかまれ！」

裕太は裕美にそう小声で叫び、二人で亮平の腕をつかみ、レポートで脱出した。

3人が消えた直後、ガチャガチャと鍵の開く音がして中里が入ってきた。

「ふむ。誰かがいたような気配はあるのだが……む？カメラの録画が止められてテープも抜かれてる……？やはり誰かがいたことは間違いないようだな。でもいつたいたどこから侵入し、そして脱出した？窓も鍵が壊れているとはいえそこから出たのなら開けっ放しのはずだ。しかしそれも無い、と……カメラはすべて止められたのか？1、2、3……14、15台だな、止まってるのは。となると……」

中里は停止させられているカメラの台数を数えると、

「隠しカメラの1台には気づかなかつたようだな。果たして何が映っているのか……」

ニヤリと笑うと、録画映像の再生を始めた。

一方、ギリギリで脱出した裕太たちは……

「いたた……やっぱ3人でレポートなんて無茶だったね。」

裕美がそう言いながら立ち上がった。裕太と裕美は脱出の際、学校の裏山の奥のほうへ飛ぶ予定だったが、3人いたことで目標地点がずれてしまい、裏門付近の自転車置き場に落ちてきてしまった。

「あゝあ、苦労して侵入したのに何も役に立ちそうなものはなしか……疲れたし、帰るか。」

亮平はそう言って帰っていき、それを見送って裕太たちも学校を後にした。

たったひとつ無事だったビデオの映像を見終わった中里は……

「ふふふ……よもやこんな決定的瞬間が撮れてるとはな。小菅兄妹が超能力者だという証拠をついにつかんだぞ！後はこの映像を見せればバラされたくないければ研究させるとも言えば確実だな……はーははは！」

ビデオに映った裕太たちの超能力の決定的瞬間に思わず高笑いするのであった。

第1章 8：探索、そして撤退（後書き）

運悪くまだカメラは残っていた……

亮平だけでなく中里にも知られ事態は最悪の展開へ！？

**第1章 9：ついに知られた秘密とテープ奪還作戦（前書き）**

ついに裕太たちの秘密の証拠を入手した中里。

そして週明け、事態は動き始める……



## 第1章 9：ついに知られた秘密とテープ奪還作戦

週明けの月曜、裕太たちが登校し朝のHRを終えた直後。

「ああ、小菅。お前たち二人を中里先生が呼んでいたぞ。HR終わったら話があるから研究室まで来るようになってな。授業は公欠扱いになるから早く行って来い。」

担任はそう二人に告げると、教室を出て行った。

（また呼び出しか……やっぱ今回は一昨日のことだよ……はあ、メンドクせえ……）

裕太はいつものようにテレパシーで愚痴をこぼす。

（とりあえず行くしかないみたいね。わざわざ授業公欠扱いにするってことは長いお説教かもしれないけど、立ち入り禁止の研究室に入った私たちに非があるんだから。）

裕美はそう返すと、未だに渋ってる裕太を引きずるように教室を出て研究室へ向かった。

「失礼します、小菅です。」

研究室のドアをノックしてそう名乗ると、すぐにドアが開き、中里が出てきた。

「待ってたぞ、小菅。さ、入りなさい。」

中里はニヤリと笑うと、二人を中に招き入れた。

「それで、今日はいったいなんでしょうか？」

裕太が不機嫌さを隠そうともせずになぞると、

「まあ、まずはこのビデオを見て欲しい。一昨日の映像だ。」

中里はそう言うと、ビデオを再生した。

（なっ！？バカな、カメラは全て止めたはずなのに、なぜ！？）

その映像を見て、裕太も裕美も表情が一変した。

「ふふふ、カメラを止めたはずなのになぜ、という感じの顔をしているな。いいだろう、教えてやる。しかし、その前にひとつ聞こう。キミたちは何台カメラを止めた？」

中里は裕太たちの表情から考えていることを読んだようにそう言うのと、裕太たちにたずねた。

「たしか15台だったかと。」

裕美がやはり不機嫌そうに答えると、

「やはりそうか。この部屋に仕込んだカメラは全部で16台あったのだよ。最後の一台は、あそこだ。」

中里はそう言って、研究室の端っこにある柱を指差した。裕太たちが近づいてみると、柱に開いた小さな穴に小型のカメラが仕込まれていたのだった。

「くそ、こりや気づかないはずだぜ……」

裕太がそう吐き捨てた。

「そこで本題だ。このビデオを証拠にもう一度聞こう。キミたちは超能力者だな？」

中里はすでに答えを知っているはずなのにあえてたずねる。

「ああ、そうですよ。」

裕太は中里の質問を肯定した。

「ちよ、裕太……」

裕美が制止するが、

「もういい、裕美。ここまでばつちり撮られたら隠しようがないだろ。それで、先生はオレたちに何をしてほしいんですか？」

裕太が裕美にそうあきらめたように話し、中里に逆にたずねる。

「応相手は先生であることを忘れてないのか、低姿勢になってはいたが。」

「それは、私の研究に協力すること、だ。私は超常現象に関する学会の論文をいくつか見てきたが、どれもたいしたこと無いものばかり。だが、キミたちに関する研究をまとめた論文を発表すれば、間違いない私は有名になれるんだ！はっはっはっは……」

中里は裕太たちに要求を告げると、自らの夢をアツく語りだしてしまった。

「それで、もしオレたちが断ったとしたら……？」

裕太がまだ笑い続けている中里にそうたずねた。すると中里は笑うのをやめ、

「もし断れば、この証拠テープを全国のマスコミに送りつける。さあ、どうするんだ？ 私の研究に協力して学会だけにとどめるか、それとも全国的に報道されるか。選択権はキミたちにある。」

中里は断った場合の末路を裕太たちに告げた。

「ふん、証拠テープなんて、こうしてしまえば……」

裕太はそう言つと、右手をかざしてサイコキネシスを発動させ、テープを天井近くまで浮き上がらせ、そのまま勢いよく床に叩きつけて壊した。

「これで証拠はなくなったな。そうそう、さつき教えてくれた最後の隠しカメラもすでに録画は停止させてるから今のは撮れてないはずだぜ。というわけで、研究には協力しない。」

裕太がそう中里に告げて研究室を出て行こうとした、そのとき。

「待ちなさい、小菅。証拠のテープはコレひとつじゃないぞ。このテープを見てキミたちに手を使わず物を動かす能力 サイコキネシスが備わっていることはわかってる。こんな事態も考慮して大量にテープをコピーして保存してあるのだよ。はーっはっはっは……」

中里は二人を呼び止めると、二人にとって衝撃の事実を告げた。

「そんな……」

裕美は愕然とした。

「裕美、まだあきらめるのは早い。全てのコピーテープを破壊してしまえばいいだけのことじゃないか。」

裕太がそう裕美を励ますと、

「そうよね、二人でやればきっと大丈夫よね。」

裕美がやる気を取り戻し、立ち上がった。しかし、

「先に言っておくが、コピーテープはとある場所に隠してある。仮

に見つけて破壊したとしても、隠し場所は複数に分かれてるから、残ったものをコピーし続けるだけだ。」

中里が再び二人を絶望の底に突き落とすようなことを言ってきた。「くそっ……その結論つてのは今すぐじゃないとダメなのか？」

ついに敬語も忘れ、裕太が不機嫌さ全開で中里にたずねる。

「できれば早くに欲しいところだが、少し待ってもいいだろう。いい返事を期待しているぞ。」

中里は待つことを了承し、二人はようやく教室に戻ることができた。すでに時刻は10時を回り、2時限目が始まっていた……公欠扱いのおかげで何も言われることはなかったが。

昼休み、裕太たちは亮平に事情を説明した。

「まさかあのときにまだカメラがあったとはな……しかもアイツは録画テープを大量にコピーしてそれを盾に脅してきてるのか……それで、どうするんだ？」

亮平は事情を全て聞いた後、そうたずねた。

「もちろん、協力なんかしない。かといってマスコミにテープをばら撒かれるのも困るからな。全てのテープを取り返す！そこで、亮平に頼みがあるんだが……」

裕太はそこでいったん言葉を切ると、

「オレは中里の足止めをするから、裕美と一緒に隠されたテープを探して取り返して欲しいんだ。こんなこと他のヤツには頼めないからな。」

亮平にそう頼み込んだ。

「元々研究室に忍び込もうって言ったのはオレだ。それが原因で秘密がばれてしまったのなら、オレは喜んで協力するよ。」

亮平が笑顔で協力を約束し、ここに3人の闘いは始まったのだ。た。

**第1章 9：ついに知られた秘密とテープ奪還作戦（後書き）**

亮平が協力を約束し、ここに3人のテープ奪還作戦は始まった。  
無事テープを取り戻し破壊することはできるのか？

## 第1章 10：テープ奪還作戦、始動

その日の放課後、教室の片隅で3人はとりあえず作戦を立てるところにした。

「裕太、アイツを足止めするって言ったけど何か方法とか考えてあるの？」

裕美がまず裕太にそうたずねる。

「アイツのことだ、オレが職員室にいるアイツにオレたちの秘密を詳しく教えてやるとでも言えば飛びついてくるだろう。そしたらどこかに連れ出して、それが成功したら裕美に知らせるから、そこから二人で探索する、って感じで行こうと思っただが。」

裕太は自らの考えたプランを二人に話した。

「なるほど。アレだけ超能力に熱心な中里ならではの作戦だな。よし、それで行こう。裕太、頼んだぞ。」

亮平がそう言って裕太を送り出し、裕美と亮平は不自然にならないうちに図書室で待機することにした。

〈裕太サイド at 職員室前〉

「失礼します。中里先生はいらっしゃいますか？」

職員室の入り口でそう呼びかけると、

「中里先生なら研究室だと思うぞ。ここにはいないようだし。」

との答えが返ってきたので、裕太は研究室に向かうことにした。

〈裕美&亮平サイド at 図書室〉

「うーん……裕太、うまくいくかな？」

裕美が本棚の間を本を探すふりをしながら近くを歩く亮平に小声でたずねる。

「なーに、裕太のことだ。アイツは普段は愚痴ばかりだけどやるべきはやってくれるからな。それは双子の妹である裕美ちゃんが一番よくわかってるでしょ？」

亮平は裕美にそう言つと、裕美は「そうだね」と笑つた。

〔裕太サイド at 研究室前〕

「中里先生、いらつしやいますか？小菅ですが。」

ドアをノックしながら裕太が呼びかけると、少ししてドアが開いた。

「おや、小菅兄じゃないか。どうしたんだね？もう今朝の答えが出たのか？」

中里は裕太にそうたずねる。

「いえ、答えはまだですが、研究に協力するためには予備知識が必要じゃないですか？それくらいなら今教えることもできますよ。ただ、ここでは話しづらいので場所を変えさせてもらいますが。」

裕太は作戦通り中里にそう持ちかける。

「ふむ。たしかにマンガや小説である程度理解しているつもりとはいえまだまだ知識が足りないこともまた事実。それでは、教えてもらおうか。」

中里はうれしそうにそう言つと、研究室を出て行つた裕太のあとを追つて部屋を出て行つた。

（裕美、聞こえるか？今ターゲットを研究室から連れ出すことに成功。鍵を閉めていたがそのくらいは能力でなんとかなるな？あとは任せたぞ）

テレパシーで裕美にそう告げ、裕太は追いついてきた中里と共に誰もいなさそうな場所を探し始めた。

〔裕美&亮平サイド at 廊下〕

「亮平くん、裕太が作ってくれたこのチャンスを活かさせないともう次は無いと思わないとね！」

裕美は廊下を早歩きで移動しながら亮平にそう告げる。

「ああ、これで失敗すればアイツも警戒してうかつに探索できなくなるだろうな。でも、アイツはいつたいテープをいくつコピーして何箇所に分けて隠したんだ？」

亮平がふと気づいたように裕美にたずねた。

「そこなのよね……ひとまず1箇所見つけてから考えましようか。」

裕美がそう言っている間に、2人は研究室の前に到着し、裕美が手をかざしてサイコネシスで開錠しようとしたが、亮平がそれを止めた。

「どうしたの？」

裕美がたずねると、

「ちよつとピッキングを覚えてみたんだ。できるかどうかかわからないが、試してみたいかな？」

亮平はそう言うと、ポケットから細い針金のようなものを取り出し、鍵穴に差し込むと、カチャカチャと動かし始めた。

しばらくやっていると、「カチリ」という音がして、研究室のドアが開くようになった。

「よっしゃ、できた！それじゃ、行こうか、裕美ちゃん。」

裕美は頷き、二人は研究室に入ってしまった。

（裕太、こちらただいまターゲットの研究室に侵入成功。探索を始めるね。）

裕美は裕太にテレパシーでそう告げた。

（裕太&中里サイド at 物置部屋）

「よし、ここなら誰も来る心配は無いな。」

裕太は物置になっっている部屋をのぞきこみ、そうつぶやいた。

「小菅、ここでいいのか？それじゃ、キミたちの能力について教え



てくれるんだな？」

中里はすでに子どものように目を輝かせて裕太を見ている。

「はあ……」

裕太は大きくため息をついた、そのとき。

「さて、冗談はここまでにして、と。」

急に中里がまじめな顔をして裕太のほうを見た。

「小菅兄。お前の目的は秘密を収めたビデオテープの奪還だな？」

中里は何もかもお見通しだと言わんばかりに裕太に問う。

「ちっ、バレてたか。なら話は早い。テープのありかを教えてもらいましょうか。」

裕太もあつさり認めると、中里にそう迫る。と、そのとき。

(裕太く、テープが1本も見つからないよ)。どうしよう？)

裕美がテレパシーで泣き言を言ってきた。

(ちよつと待ってる。バレたからここから強硬手段で聞き出してやる。)

そう伝えると、

「そう、オレの役目は先生の足止め。その間に裕美と亮平がテープを探す手はずになっていたんだけど……どこに隠したんです？全然見つからないらしいですが。」

裕太が計画がバレたことで無意味になった計画をすべてぶちまける。

「ふん。ということは能力の秘密を教えるといったのも……」

「もちろん口からでまかせに決まってるじゃないですか。テープを破棄してもその話を録音されたら振り出しに戻るわけですからね。

そう簡単に教えるわけがありません。」

裕太はがっかりする中里に対しそう言い放った。

「問題のテープは絶対見つかるわけが無いのだよ。お前の役目が足止めとわかった以上もはや用は無い。さらばだ！」

中里はそう言うと、30過ぎという年齢のどこにそんな力があるのか、ジャンプして空中で1回転して裕太を飛び越えて逃げようと

した……のだが、  
「待て！」

裕太はそう叫ぶと、まだ空中にいる中里に対しサイコキネシスを発動させ、天井にはりつけ状態にした。

と、身体は天井に張り付いていても服までは効果を及ぼさないため、化学教師の象徴とも言える白衣が垂れ下がる格好になったのだが、そこから「何か」がスポッと落ちてきた。

「ん？」「しまった！」

裕太がその「何か」を拾い上げると、中里がしまったと叫んだのはほぼ同時だった。

「これは……ビデオテープ!？」

裕太が拾い上げたのは1本のビデオテープだった。

「これが上から落ちてきた、ということは……やっぱりそういうことか。」

裕太が上を見ると、中里の垂れ下がった白衣の中に大量のテープが納まっていた。

（裕美、見つけたぞ！テープはターゲットの白衣の中に隠されていたぜ。普通教室棟4Fの物置になってる部屋にいるからすぐ合流してくれ！）

裕太はすぐに裕美にテレパシーで伝えた。

（裕美&亮平サイド at 研究室前）

「亮平くん、裕太がテープを見つけたわ。先生の白衣の中だったそうよ。とりあえず、行きましよう！」

「OK、了解した！」

裕美が亮平にそう伝えて研究室を飛び出していったので、亮平もすぐに後を追ったのだった。

**第1章 10：テープ奪還作戦、始動（後書き）**

ついにコピーテープのありかを発見した裕太。  
これを取り戻すことは出来るか？

第1章 11：作戦は急展開へ（前書き）

テープを発見し、中里を追い詰めた裕太たちだったが……

## 第1章 11：作戦は急展開へ

数分後、裕美と亮平が合流した。

「裕太、テープは？」

裕美が少し息を切らしながらそうたずねる。

「まだ大半はあそこにある。」

裕太はそう言っていてまだ天井に浮かせたまま固定している状態の中里の白衣を指す。

「ホントだ……ていうかこれってマンガになかった？双子の超能力者とその秘密を追いかける教師の対決の中で今の私たちみたいに能力の証拠をビデオに撮られて、そのテープを白衣の中に隠してるって……」

裕美がそんな話をする、

「ふふふ……よくぞ気づいたな。そう、この方法は私のマンガコレクションの中のひとつからアイデアをもらったものだ。」

中里は未だに天井で逆さづりに近い状態なのにもかかわらず不気味に笑いながら自慢げにそう言い放った。

「あのマンガは私も小学校のとき読んでたけど、最後は先生が負けるのよね。ところで、その状態でいつまでもつらくないんですか？全てのテープを引き渡して降伏し、これ以上私たちの秘密に関わらないと誓えるなら下ろすように言ってもいいですよ？」

形勢逆転だと言わんばかりに裕美が交渉を持ちかける。

「ぬう……動けんか……」

中里はどうか自力で脱出できないかともがいてみるが、ピクリとも身体は動かなかった。

「いくらもがいても無駄です。オレが解除しない限りは絶対に動かないはずですよ。さて、先生。裕美と同じ質問です。どうしますか？」

裕太がもう一度中里に対し同じ質問をした。

「くっ……仕方ない。降伏しよう。どうやら私の研究もこれまでのようだな。」

中里が降伏宣言をしたのを聞いて、裕太は能力を解除して中里を床に下ろした。しかし、その直後、

「はーっはっはっは、さらばだ！」

自由が利くようになった直後、中里は態度を翻して走り去った。

あまりに素早い動きに、裕太も裕美も間に合わず、入り口で誰も来ないか見張りをしていた亮平は後ろから突き飛ばされ、前のめりに転んだ。

「いつてえ……アイツ、あれでも教師か！？しかも、あの捨て台詞、まるつきり悪役じゃねーか。」

立ち上がった亮平が悪態をつく。

「とにかく、追うぞ！」

裕太が2人に声をかけ、3人は中里を追いかけ始めた。

そのころ、逃げた中里は、自分の研究室に立ち寄っていた。

「まさか超能力があれほどのものだとは……果たしてこの薬で対抗できるか……やってみるしかないか。」

中里は試験管に入った妙な色の薬品を小さなビンへ数個に分けて入れると、研究室を出て走り去った。

中里が走り去って数分と経たないうちに、裕太たちも研究室に到着した。

「ちっ……ここじゃないか。早く見つけないとテープをばら撒かれたらオレたちの平和な生活は終わりだ。行くぞ！」

裕太がそう言って再び走り出そうとしたとき。

「あれ？さっきここにあった変な色の薬がなくなってるよ？」

裕美がさっき探索したときにあったものが無いと言ってきた。

「薬？なんだそりゃ？」

裕太が足を止めて振り返る。

「よくわからないけど、さっきテープを探すときには試験管に入っ  
てここに置いてあったんだ。何色とも言いがたい微妙な色合いだっ  
たから危ないかもってことでほつといたけど。」

亮平がそう話す。

「とりあえず中里が持つていった可能性がある。何の薬かわからな  
い以上警戒だけはしておいたほうがいいな。」

裕太の言葉に2人は頷くと、再び中里を探して校舎内を移動し始  
めた。

それから3人はあちこちで中里を見つけては見失い、また見つけ  
ては見失いをくり返し、やがて探す場所も尽きたころ、中里が体育  
館の裏へ走り去るのが見えた。

急いで追いかけると、体育館裏の物置の陰に中里の白衣がちらり  
と見えた。

「もう逃げられないぜ。おとなしく降伏したほうがいいと思うよ、  
先生。」

追い詰めた裕太がそう言うと、中里はとりあえず物陰から出てき  
た。だが、

「ふっ。降伏はしないぞ。逆に今こそお前たちをぎゃふんと言わせ  
てやる。」

中里は裕太たちに宣戦布告した……のだが、

「今どき『ぎゃふん』なんて言うやついねーって……」

亮平がそうつぶやいたのをきっかけに、3人とも笑い出してしま  
った。

それに対し顔を赤くした中里は、白衣のポケットに手を入れ、さ  
つき研究室から持ってきた小びんのフタを開けると、中身を一気に  
飲み干した。

「あっ、さっきの変なクスリ！中里が飲んじゃった！？何のクスリ

なんだ？」

あまりに突然すぎる展開に3人の顔から笑いが消え、様子を見てみると、

「ふっふっふ……」

中里は不気味に笑うと、右手を前に突き出した。すると、離れた場所にいるはずの亮平が吹っ飛んだ。

「なに！？何が起こったの！？」

裕美は急いで後ろへ走り、亮平を助け起こした。

「ふふふ……なにが起こったかわからないようだな。いいだろう、教えてやる。さっき私が飲んだ薬は人工的に超能力を得られるようになる特殊なクスリだ。前から開発は進んでいたが、最近やっと完成したのだ。それを飲んだ私は君たちに勝るとも劣らない能力を手に入れたのだ！」

中里はそう叫んだ。

「そんな薬で得た能力など本当の能力じゃない。裕美、亮平は大丈夫なのか？」

裕太が裕美にそうたずねると、

「ダメ、今の一撃で気絶してるわ。まがい物でもかなり強力みたいね。」

裕美は首を振ってそう言った。

「くそ……オレたちはあまり攻撃系の能力はないからな。だけど、人工的な能力だからいつか効果は切れる。それまでの持久戦だ。」

裕美、行くぞ！」

裕太はそう言うのと、落ちていた鉄骨の一部を拾い、武器代わりに構えるのだった。



## 第1章 11：作戦は急展開へ（後書き）

まさに物語は急展開でシリアスなバトルモードへ！  
この闘いの行方は？

第1章 12：意外な決着、そして……（前書き）

自ら開発した「人工的に超能力を得るクスリ」とやらを飲み、超能力を得た中里と、それでもテープを取り戻そうとする裕太たち。  
この闘いの行方は？

## 第1章 12：意外な決着、そして……

「はーはっはっはっは、どうしたどうした、その程度だったのか？  
キミたちの能力は？」

中里が高笑いしながら薬によって得たサイコキネシスの能力で裕太たちを攻撃する。

「くそっ、目的が全然違うものになってんじゃねーか。」

裕太が中里の攻撃をかわしながら悪態をつく。

「チカラのあまりの強さに自分を見失っているわ。たぶんこのままじゃ……」

裕美もまた時折自分に向かってくる攻撃をかわしつつ、つぶやいた。と、そのとき。

「ぐっ！？」

中里は突然自らを襲った違和感に攻撃を止めざるを得なかった。

「なんだ？」

裕太たちはひとまず警戒しつつも持っていた鉄骨を投げ捨て、動きの止まった中里に近づいていった。

「ぐっ……うう……薬……クスリさえあれば……」

中里はどうやらさっきの薬の効果が切れて能力が消えたためにその副作用か何かでうめいているようだった。

「しよせん化学的に作り出した薬では本物に似せることはできてもやはりまがいもの。副作用もあるだろうし、早く影響を取り除いてやったほうがいいな。裕美、水を持ってきてくれ。」

裕太はほぼ意識を無くした中里の身体を支えて気道を確保しつつ、裕美にそう頼んだ。

「うん、わかった。」

裕美はそう頷くと、まだ無意識的にクスリクスリうなってる中里を裕太に任せ、水を汲みに行った。

裕美がペットボトルに水を汲んで戻ってくる頃、中里の攻撃で気絶していた亮平も目を覚ました。

裕美は亮平のぶんの水も一緒に用意していたので、裕太に中里のぶんの水を渡すと、裕美は亮平にゆっくり水を飲ませた。

一方、裕太も中里に水を飲ませると、いったん寝かせて、救急車を呼んだのだった。

到着した救急隊になにがあつたかと聞かれたが、裕太たちはうまくごまかし、運ばれていく中里を見送つたのだった。

あとで裕太たちが救急隊に話を聞くと、中里は特に身体に異常はないそうだが、検査などのために1日〜数日程度入院することになつたらしい。

中里が持っていた「人工的に超能力を得るクスリ」の残りは運ばれる際に白衣ごとテープとともに回収して廃棄したのだった。

翌日、検査で異常なしと診断を受けた中里は無事に退院し、放課後になるのを待つて裕太たちの家へやつてきた。

「先生、どうしたんですか？つていうかもう大丈夫なんですか？」

玄関で応対した裕美がたずねる。すると、

「すまなかつた。もうキミたちの秘密を追いかけたりはしないし、誰にも言わない。これで許してはもらえないだろうか？」

中里は裕美に裕太も呼んでもらつて、二人が揃つたところで土下座して謝つた。

「わかつた、わかりましたから頭を上げてください。」

これには裕太も裕美も驚いて慌ててそう言った。

「いや、本当にすまなかつた。」

中里は何度も謝りながら帰っていった。

数日後、裕太たちが帰宅すると、珍しく両親ともにそろっていて、「あ、裕太も裕美もおかえり。ちょっと話があるんだけど、いいかしら?」

二人の両親である恵美えみと裕輔ゆうすけがそう言ってきた。

第1章完、間章を挟み第2章へ続く

**第1章 12：意外な決着、そして……（後書き）**

やはりクスリには副作用はつきものってことで決着。

ここで第1章が終わり、次回は間章として両親との話、その次から第2章へ入ります。

評価、感想などお待ちしております。

感想などはやはり作者のやる気之源になるのでどんな辛口でもいいです。よかったら書き込んでみてください。

**間章：明かされた真実とパワーアップ（前書き）**

中里とのビミヨーな決戦から数日が過ぎたある日、帰宅した裕太たちは両親から話があると言われた。  
果たして両親は裕太たちに何を話すのか？

## 間章：明かされた真実とパワーアップ

「それで、話って？」

部屋で着替えを済ませた裕太たちは、ソファに座って両親と向き合った。

「うん、まあ主に話があるのは母さんのほうだな。恵美、それじゃ任せたぞ。」

裕輔はそう言うと、自分はみんなのお茶を入れようと立ち上がり、すぐにお茶を入れて戻ってくると、それぞれの前においた。

「裕太、裕美。いきなり本題に入るけど、最近能力の調子はどう？」

恵美はお茶を一口飲むと、いきなり裕太たちにそうたずねる。

「え！？母さん、オレたちの能力のこと知ってたの！？」

裕太が驚いてお茶を噴き出しそうになりつつ聞き返す。

「当たり前よ。だって、裕太たちの能力は私からの遺伝だもの。もつとも、今ではほとんど使えないけどね。」

恵美はそう言いながら、テーブルの上にあった小さな置物を浮かせてみせた。

「そうだったんだ……でもなんで今になってその話を？」

裕美が驚きつつも、恵美にそう問いかける。

「あのね、母さんの家系は高い確率でいわゆる超能力者が生まれるの。私や裕太たちもその一人。それで、17歳か18歳になるころに、親とかの先代能力者が次の世代にあるものを渡すときたりみたいなのがあって、それを今やろうってわけ。」

恵美はそう答えると、両腕につけていた腕輪を外し、二人の前に置いた。

「これは……腕輪？」

裕太は腕輪を手に取ると、眺めながら聞いてみた。

「そう。それこそが母さんが受け継いだ能力強化アイテムなの。つけければそれだけで能力がパワーアップするはずよ。二人とも、つけ



てみなさい。」

恵美は裕太たちに腕輪の説明をして、つけてみると言った。その言葉に従い、裕太が右腕に、裕美が左腕に腕輪をつけた。すると、一瞬だけ二人の身体が光った。

「ところで、今まではどこまで能力が使えたんだい？」

それまで黙って話を聞いていた裕輔が裕太たちにそうたずねる。

「うーんと、二人一緒ならテレポート、二人相互間のテレパシー、あとは単独で使えるサイキネシスの3つかな。」

裕太がそう説明した。

「なるほどね。今後は腕輪の効果でいくらか能力が強化されると思うから、適当に試してみなさい。ただし、ほかの人に知られるのが嫌なら時と場所を考えてね。」

恵美はそう裕太たちに話した。

「ところで、父さんは能力者じゃないの？」

裕美が裕輔にそうたずねると、

「ああ、私はごく普通の人だ。母さんが不思議なチカラを使うことは結婚してから知ったことだしね。」

裕輔は笑って裕美にそう話した。

「能力の強化か……どうなったんだらう？」

裕美がそうつぶやいた直後、裕美の身体がそれまでいた裕太の前から後ろに移動していた。

「あれ？私いつの間にか裕太の後ろに……？」

裕美が呆けた顔をしている。

「もしかしたら………やっぱそうか。」

裕太が何かの可能性に気づき、自ら試したところ、予想通りだったらしい。

「あれ、裕太も今一人でテレポートした？そっか、腕輪のチカラで

二人そろってなくてもレポートできるようになったんだ……」  
裕美もそのことに気づいたようで、今度は確信を持って試し、部屋の外へ移動したり、戻ったりを繰り返した。

その後、いろいろ二人で試した結果、かなりのパワーアップを果たしたことが判明した。

まず、レポートはそれまでは二人そろって初めて使えるものだったが、単独でも使用可能になり、二人そろって使った場合、これまでよりも使ったあとの疲労が少なく、連続使用も可能になった。

テレパシーは特に変化なし、と思われる。

サイコキネシスに関しては、今までより重いものも動かせるようになった、と思われる。たとえば人間に使つと、これまでは動きを止めるのが精一杯だったのが、浮かせることも可能になった。これは裕太と裕美、それぞれを実験台にして実証済みである。

さらにパワーアップ後の新能力として、自分たち以外のモノやヒトをレポートさせることも可能になった。ヒトはまだ実験していないが、モノは部屋の中のをいろいろ試した二人であった。

一方、そのころ居間では……

「あの子どももう17歳。そろそろ>ヤツラくがあの子達の存在に気づいてもおかしくないころかもしれないわね……」

恵美が意味深なことをつぶやいた。

「>ヤツラくって、昔君がかかわった連中のことかい？」

裕輔が恵美にそうたずねる。

「ええ、そうよ。もう関わりたくない」と15年も前に脱退したのに、

今でも時々電話をかけてくるんですもの。しつこいっただらいいわ。今は幸い裕太たちのことに気づいてないようだけど、もし知ったら間違いない狙ってくるでしょうね。そのときにあの子達がどうするかはあの子達自身に任せようと思っているけど……」

恵美はそこまで話すと、「今日はもう寝ましよう」と言って寝室へ入っていった。

## 間章：明かされた真実とパワーアップ（後書き）

母親から能力の秘密を聞き、さらに能力を強化する腕輪を受け継いだ裕太たち。

一方、恵美が裕輔に話していた「ヤツラ」とは？  
新たな戦いが始まるうとしているのだろうか？

第2章くスペシャルアピリティーズ(S・A・C)編く(前書き)

新章突入!

今度はいつたいどんな展開が裕太たちを待ち受けているのか?

## 第2章<スペシャルアビリティーズ(S・A・編)>

裕太たちが母親である恵美から能力強化の腕輪をもらってから1ヶ月が過ぎた。

「裕太、裕美、起きなさい！遅刻するよ！！」

恵美が二人の部屋に入りそう叫ぶ。

「ん〜……あと5分……」

裕美がそう言っただけでまた布団にもぐりこもつとし、裕太にいたっては、

「ZZZ……」

まったく起きる気配すらなかった。

「二人とも、起きないと布団引っぺがすよ！」

恵美が最終警告とばかりに怒鳴るが、それでも二人は起きなかった。恵美はサイコキネシスで布団を引っぺがし、ついでにそれにしがみついていた二人も一緒にベッドから飛ばされ、床に落ちた。

「二人とも、目え覚めた？」

恵美が時計を見せながらそう問いかける。やっと目を覚ました二人が時計を見ると、時刻はすでに8時25分だった。

「やべええええ！裕美、急げ！」

「遅刻〜〜〜〜！？」

二人とも弾かれたように立ち上がると、3分で制服に着替えているものように遅刻寸前の最終兵器(?)、レポートで強引に間に合わせた。

一方、今日は仕事が休みらしい恵美は、主婦らしく家事をこなし、掃除を終えて一息つくころと思ったとき、家の電話が鳴り響いた。

「はい、小菅です」

恵美がそう出ると、

「……私だ。もうあれから15年になるか？気持ちに変わりはないだろうか？私たちにはあなたのチカラが必要なのだ。」

電話の向こうから謎の男の声が聞こえてきた。その瞬間、恵美の表情が曇る。

「もう私には昔のようなチカラはありませんし、あつたとしてもあなたたちに協力することはありませんわ。では、失礼します。」

恵美がそう言って電話を切ろうとしたとき。

「ふっ……あなたがダメならば子供たちに頼むまでだ。確か今年17歳になるとの調査報告があがってきてる。能力者ならそろそろ一人前だろう。」

男は電話の向こうでそう告げると、電話を切った。

「まずいわね……裕太たちがヤツラに協力することはないと思うけど、ヤツラもきつとこの15年の間に変わったこともあるはず。十分注意するように言っておかなくちゃ。」

恵美は深刻そうな顔でそうつぶやくと、再び家事に取り掛かった。

放課後、特にすることもないので裕太たちは帰宅するため学校を出た。と、校門を出た直後、校門の近くに止まっていた黒塗りの車から数人の若い男が出てきて裕太たちを取り囲んだ。

「小菅裕太さんと裕美さんだね？」

「男の一人がそうたずねる。」

「そうですけど、何か？」

裕太がそう返す。

「私たちは昔キミたちの母親である恵美さんが所属していたグループ【スペシャルアビリティーズ】通称【S・A・】の調査員だ。単刀直入に聞かせてもらうが、キミたちは恵美さんの能力を受け継いでいるか？」

なにやら聞いたことのないグループの調査員と名乗った男は裕太たちにそうたずねた。

(なんか変なヤツラだな。どうする、裕美?)

裕太が答える前に裕美にテレパシーでたずねる。

(とりあえず保留して家に帰ったら母さんに聞いてみようよ。)

裕美はそう話し、裕太も同じ意見だったので、

「とりあえず何のことかわからないから、家で母さんに聞いてみるので今日は帰ってもらえますか?」

裕太は男たちにそう話した。

「わかりました、ではまた。」

男たちはあっさり引き下がり、乗ってきた黒塗りの車で引き上げていった。

「いったい何者なんだ? 【スペシャルアビリティーズ】通称【S・

A・】とか言ってたよな?」

裕太が首をかしげながらそう裕美にたずねる。

「うん……とりあえず、帰ろ?」

そう言っただけで裕太と裕美は歩き出した。

家に帰ると、恵美はすでに夕食を作っていた。

「ただいまー。」

「母さん、夕食が終わったらちよつと聞きたいことあるんだけど、いい?」

裕太がそう恵美に聞く。

「ええ。私からも話したいことがちょうどあったの。」

恵美もそう話し、帰りの遅い裕輔を放つといて3人で先に夕食を済ませた。

「それで、私に聞きたいことって?」

恵美が裕太に話を促すと、



「今日学校の帰りに【S・A】ってグループの調査員とか言う連中がオレたちのところに来たんだ。それで、昔母さんが所属していたって言うってだからちよつと聞こうと思つてさ。」

裕太はそう話す。

「もうヤツラがそんなところまで……裕太、裕美。確かに母さんは昔そのグループにいたわ。そこで犯罪まがいのこともたくさんやらされてきた。あのグループは私とかの超能力などの特殊能力を持つ人材を集めてこの国を転覆させようとしている悪の枢軸よ。私は15年前に脱退してグループを離れたけど、今でも復帰の誘いが来る。あんたたちのところに来たのもおそらくはグループへの勧誘でしょう。絶対にかかわっちゃダメよ。」

恵美は裕太たちにそう警告する。

「そうなんだ。見た目からして怪しいとは思っていたけど、まさかそこまでとはな……」

裕太が苦笑いしながらそう言った。

「でも、なんでそこまでわかってる母さんがいるのに警察は動かないの？」

裕美がそうたずねる。

「詳しいことはわからないけど、うわさでは<キング>と呼ばれるグループのトップが警察のトップと同一人物かあるいは親密な関係にある、っていうのがあったわね。」

恵美はそう答えた。

「そっか……とにかく、そのグループは相手にしないって方針でいけばいいの？」

裕美はもう一度たずねる。

「そう。ただ私がグループを脱退してから15年、当時は私より強い能力者はいなかったけど、15年も経つてから新しい強力な能力者がいる可能性は高いわ。もし連中が接触してきたら十分気をつけなさい。」

恵美はまじめな顔でそう二人に告げた。

## 第2章＜スペシャルアビリティーズ（S・A・C）編＞（後書き）

ついに謎のグループ、「スペシャルアビリティーズ」（通称【S・A・C】）が動き出した。

裕太、裕美、そしてかつて所属していたらしい恵美はどうするのか？  
そして次回以降【S・A・C】はどう動く？

感想などいただけたら幸いです。

注：今後、「スペシャルアビリティーズ」のグループ名は通称のみの表記となります。

## 第2章 2：警戒する裕太たちと動き出した【S・A】

翌日、登校途中に亮平に会った裕太たちは、昨日のことを話した。「ぶはっ！ごほっごほっ……【S・A】って、なんだその変な名前のグループは？」

亮平が話を聞いた直後、飲んでいたお茶を思いっきり嘔き出した。「まったくだよな。しかも昔そこに所属していたらしいうちの母さんに話を聞いたら、『悪の枢軸だから関わるな』だつてさ。ただ、しばらくはオレたちに接触してくることも考えられるから、一応亮平も気をつけていてほしいんだ。オレたちの関係者として最悪の場合狙われることもありうるからな。」

裕太は亮平にそう話し、3人で学校まで歩いていった。

昼休み、亮平にしたのと同様の警告を念のため中里にすると、「そのグループなら私も知っているぞ。私が超能力に興味をもってすぐ研究対象にさせて欲しいと頼んだが、拒否されたグループだ。なるほど、キミたちならあのグループが目をつけてもおかしくないだが、私は心配無用だ。もしキミたち自身や友達が狙われる可能性があったとしても、生徒は私たち教師が守る。それが教師の使命だからな。」

中里は笑って裕太たちにそう言った。

「まあ、こういつちやなんですけど、たとえ先生が狙われたとしても、なんか先生ならそのグループを研究してそうな気がしますね。」

裕美が笑いながらそう言うと、

「ふむ、そうだな。私ならきつとそうするだろうな。」

中里はあっさり認めた。

「先生、そこは否定しましょうよ。」

裕太もやはり笑いながら言い、かつて能力の秘密をめぐって争ったとは思えないほど和やかに時は過ぎていった。

放課後、裕太が教室の窓から校門の外を眺めてみると、やはり予想通り昨日の黒塗りの車がいた。

「裕美、昨日の連中が校門で待機してる。裏門から帰ろう。」

裕太は帰り支度をしている裕美の席まで行くと、そう告げた。

「うん、わかった。」

裕美は頷き、二人は裏門からこっそりと学校を抜け出し、昨日の連中に気づかれること無く帰宅することに成功した。

一方そのころ、【S・A】の調査員たちは……

「おかしい……生徒たちはほとんど出てきているのに彼らが出てこないぞ？」

調査員のリーダーと思われる男がつぶやいた。

他の調査員たちも生徒の波の中から裕太たちを見つけようと目をこらしてみるのが、すでに裏門から脱出している裕太たちを見つけることは当然できなかった。

やがて、すっかり日も暮れたころ、校門が閉じられたのを受けて、調査員たちもあきらめて撤収した。

グループの本部に戻り、調査員たちは奥の部屋へ向かうと、部屋の前で一人の男が待っていた。

「ジャック様、ただいま戻りました。」

調査員のリーダーがそう言うと、

「おお、《チーム・クローバー》よ、戻ったか。しかし、なんだその浮かない顔は？」

部屋の前で待っていた男は彼らのことを《チーム・クローバー》と呼び、そうたずねた。

「校門の前でターゲットを待ち構えていたのですが、今日は接触できませんでした。」

とリーダーはジャックと言う男に話した。

「そうか、我らがキングがお待ちだ。中へ入って報告するといいい。」

ジャックはそう言うと、扉をあけて《チーム・クローバー》の面々を中に入れた。

「キング様、ただいま戻りました。」

中に入ってそう報告すると、

「うむ。それで、小菅恵美の子どもはどうした？」

キングはそうたずねた。

「もうしわけありません。今日は接触できませんでした。どうやら警戒されたようです。」

リーダーはそう報告した。

「よい、ならば明日からは幹部クラスの能力者を同行させよう。それでターゲットを我ら【S・A・】の仲間に加えるのだ。よいな？」

キングはそう言うと、部屋の奥から一人の女性を呼んだ。

「クイーン、明日より彼ら《チーム・クローバー》に同行し小菅恵美の子どもたちと接触し、ここへ連れてくるのだ。お前の能力なら行けるな？」

キングはそうたずねた。

「ええ、お任せください。かならずやキングの意向に沿って見せますわ。」

クイーンと呼ばれた女はそう言うと、妖しげに笑った。

「うむ。それでは、《チーム・クローバー》とクイーンよ、任せただ。では、行くがよい！」

その言葉を受けて、《チーム・クローバー》のメンバー10人とクイーン、計11人はキングの部屋を後にした。

「あの、クイーン……様？ひとつ聞いてもよろしいでしょうか？」

《チーム・クローバー》のメンバーの一人、ファースがそうたずねる。

「ええ、いいわよ。それで、何かしら？それと、私は様をつけて呼ばれるの好きじゃないから、そうね……クイーンさんとかでいいわよ。」

クイーンはファースに聞き返し、ついでに呼び方も直した。

「あ、はい、わかりましたクイーンさん。それで、実は自分はまだこのグループに入って間もなく、よくわからないのですが、幹部の皆さんが持っている能力ってなんなんですか？」

「ファースはクイーンにそう質問した。」

「ああ、それは知らないもののほうが多いわね。でも、一緒に行動するあなたたちなら知る権利はあるわね。いいわ、教えたいわ。」

「クイーンはそこでいったん言葉を切り、

「私の能力は他の幹部の連中と違って間接攻撃や補助に特化しているの。ターゲットの動きを封じるもの、ターゲットに触れることで体力を吸い取るもの、主にこんなものね。ジャックや今日ここにいなかったエースなんかはもっと攻撃に特化した能力を持っているわ。」

「クイーンは自らの能力についてそう説明した。」

「なるほど、よくわかりました。」

「ファースはそう言って頷いた。」

「一応私は明日から同行するけど、まずはあなたたちで交渉をして、あまりにターゲットの抵抗がひどいようであれば私が出て交渉するわ。とにかくターゲットをキングのもとへ連れて行けるようにすればいいの。いい？」

「クイーンは《チーム・クローバー》の面々に作戦を確認し、そう指示した。」

「はっ！了解しました！」

《チーム・クローバー》の10人の声がきれいにそろい、夜は更けていくのだった。

第2章 2：警戒する裕太たちと動き出した「S・A・I」（後書き）

調査チーム《チーム・クローバー》に幹部を務める能力者が同行することが決まった。

果たして裕太たちはどうなるのか？  
感想などいただけたら幸いです。

## 第2章 3：謎の転校生現る（前書き）

ここまで毎日更新を守っていたのがついに途切れました……  
昨日の更新を楽しみにしていた方がもしいたのならばこの場でお詫  
びいたします。



## 第2章 3：謎の転校生現る

翌日、裕太たちが登校すると、なにやら教室が騒がしかった。

「なんかあったの？」

裕美がすでに教室にいた秋子にたずねると、

「なんかね、今日うちのクラスに転校生が来るみたいよ。さっき職員室にいたらしいんだけど、かなりカツコよかったって。」

秋子は興奮気味にそう話した。

「なるほど、どつりで女子ばかりが騒いでるわけだ。」

裕太は改めて教室内を見回しながらそうつぶやいた。裕太がそう言ったとおり、女子はものすごいきゃーきゃー騒いでいるのに対し、男子はそれほど興味ないのか、いつもどおりの朝の風景だった。

そうこうしているうちにチャイムが鳴って、担任の武田たけだが入ってきた。

「あゝ、どうやらもう知っているようだが、今日このクラスに新しい仲間が入ることになった。入ってきなさい。」

そう呼ぶと、ドアを開けて一人の少年が入ってきた。

「初めまして、今日からこのクラスの一員になります、高木たかぎ 剛士たけしです。みなさん、よろしくお願いします。」

高木剛士と名乗った少年は、そう挨拶して軽く会釈した。それに対し、女子の黄色い悲鳴が教室を包み込み、男子はあまりの騒音に耳をふさぐのであった。

「はいはい、いつまでも騒いでんじやないぞー。それで、高木くんの席は、と……お、小菅妹の隣がちょうど空いてるな。だれか、空き教室から机とイスを持ってきてやれ。」

武田はそう言うと、HRを終わらせて出て行った。

昼休みは転校生恒例の質問責めが女子たちによって行われていた。

「ねえねえ、前はどこに住んでいたの？」

「身長高いよね、どのくらい？」

などなどあれこれ質問をされていた高木は、その全てに丁寧に答えてあげていた。それを教室の隅に避難して見ていた裕太と亮平は

……

「くそ、なんであんなにさわやかなんだ？」

亮平がそうつぶやく。

「世の中には何をやってもかっこよく決まる、そんなヤツがいるもんだ。オレたちにはできない芸当だ。こればかりはあきらめるしかないな。」

裕太がため息をつきながらそう返す。と、そこへその話題の主、高木がやってくる。なぜか裕美も一緒に。

「えっと、そこにいる裕美の双子の兄の裕太だ。よろしく、高木くん。」

裕太がそう挨拶する。と同時に、

(裕美、いったいどうしたんだ？)

とたずねてみる。すると、

(いや、別にたいしたことじゃないんだけど、私たちが双子だっつてことを知って、片割れだけじゃなくてぜひ二人と仲良くなりたいたって言ったからね。)

裕美はそう答えた。

(なるほどね。まあ、友達が増えることは悪いことじゃないからな)

裕太がそう話したところで、

「ところで、高木くんは何か趣味とか特技ってあるの？」

裕美がそうたずねる。

「うーん……趣味はスポーツ、特技は人に言えるようなものはないかな。それと、僕のことには剛士って呼んでくれるかい？なんか高木くんだと落ち着かなくてね。」

剛士はそう裕太たちや亮平、それと他のクラスメートに言った。

「なるほど、やっぱり見た目がさわやかなら趣味までさわやかと来るか。」

亮平が笑いながらそう言ってるうちに、授業開始のチャイムが鳴り響いた。

そして、放課後。剛士と話していたところ、家と同じ方向だということに気づいた裕太たちや亮平は、一緒に帰ることにして、支度を済ませると教室を出て行った。

しかし、この時点で裕太たちは【S・A・】のことをすっかり忘れていた。

校門を出たときに裕美がそのことを思い出し「あつ」と小さな声をあげたときにはもう遅く、校門前で待機していた黒塗りの車から【S・A・】の調査員、《チーム・クローバー》の面々が降りてきて、あつという間に裕太たちを取り囲んだ。ちなみに、近くにいたほかの生徒たちは、関わりたくないのか、あつという間にいなかった。

「ちっ、すっかり忘れてたぜ。えーっと……なんだっけ、こいつら？」

裕太が不機嫌そうにそう吐き捨てると、

「ああ、失礼。我々は【スペシャルアビリティーズ】通称【S・A・】の調査チーム、《チーム・クローバー》のメンバーです。私はそのリーダー、テンズという者です。それで、一昨日聞いたことの答えを聞かせてもらえますかな？」

テンズと名乗った男は裕太たちにそうたずねた。

「ああ、その話か。たしかにオレや裕美は母さんから受け継いでいるけど、あんたたちには協力しないよ。母さんがいろいろ話してくれたからな。裕美、亮平、剛士、行こうぜ。」

裕太はそうテンズに言っ、帰ろうとした。しかし、他の調査員たちがなおも取り囲む。

「はつきり言っ、それじゃ困るんですよ。15年前の伝説の能力者、

小菅恵美の子どもは必ず仲間に加えるとのキングの指令が出てるんでね。」

テنزズはそう裕太たちに告げた。

「何をしようとオレたちの答えは変わらないぜ。それに、亮平や剛士は関係ないはずだ。」

裕太はテنزズをにらみつけながらそう言う。

「そうやってドサクサにまぎれて逃げられちゃ困るんで、お友達も一緒にいてもらいますよ。しかし、このままじゃらちがあきませんね。やむをえません、クイーンさん、お願いします。」

テنزズが車に向かってそう呼びかけると、

「もう私の出番？？たく、仕方ないわね。」

などといいながら女が一人出てきた。

「すみません。しかし、能力を持たない我々では、らちがあきませるので。」

テنزズがそう謝ると、

「ま、いいわ。あとは私に任せなさい。」

クイーンはそう言うのと、突然の登場にあ然としている裕太たちのところへやってきた。

「誰が出てこようとオレたちはあんたたちに協力することは無いよ。

いくらやっても無駄だからさっさと帰りな。」

裕太がそうけんか腰でクイーンに言うのと、

「そんな強がりがいっつまで通じるかしら？」

クイーンがそう言うのと、一瞬目が光った。

「ん？……てめえ、なにしゃがった？」

裕太がそうクイーンに問う。

「なにして、逃げられたら困るから動けないようにしただけよ。さて、ここまで追い詰められてもまだ拒むの？」

クイーンはそう言うのと、ゆっくり裕太に近づいてくる。

「当たり前だ。何をされようと、いや、こんなことをするような連中の仲間になんかなれるわけが無いんだ。」

裕太はピンチにあってなお強がりを見せる。

「ふーん……それじゃ、力づくでもキングのところへ連れて行くしかないわね。覚悟しなさい、本部ならマインドコントロールの達人がいるからどんな強情なヤツでもころりと寝返るわ。」

クイーンはそう言うのと、さらに裕太に近づき、ほぼ密着するまでに近づいた。

「だから、そんなことするようなら協力することはないっての。いいからさっさと解放しろよ。つーかあんた年いくつだよ？化粧濃くてうざったいんだけど。」

裕太は悪態をつく。

「あ、あんた……この私が一番言われたくないこと言ったわね……少し黙ってなさい。」

クイーンはこめかみに青筋を浮かばせてさういうと、裕太を思いつきり抱擁した。

「言ってることとやってることがおかしくな……なんだ……これ……ちからが……ぬけ……」

裕太はさういうと、その場に座り込んだ。

「裕太？どうしたの？」

裕美もまた動けない中、突然座りこんでしまった裕太を心配して声をかける。しかし、裕太は座りこんだままなにもしゃべらなかつた。

「無駄よ。彼は私に体力を吸い取られてほぼ気絶に近い状態だから。」

クイーンが代わりにさう説明する。

「裕太がさつきからずつとやってたけど、私たちの能力はこんなことするためにあるんじゃないわ。だからけしてあなたたちに協力することはありえないの。早く解放してくれない？」

裕美もだんだん言葉が乱暴になってきた。

「いくらでもほえてなさい。私たちの役目はあなたたちをキングの待つ本部へ連れていくこと。そのためなら手段は選ばないわ。」

とクイーンが言って、裕美も裕太と同じようにするために近づいてくる。と、そのとき。どこからか光の弾丸が一発飛んできて、クイーンを弾き飛ばした。

裕美や亮平がそれに驚いていると、次の瞬間には4人の姿はその場から消えていた。

「い、いまのはいったい……?」

裕美がそうつぶやくと、

「どうやら無事に逃げ切れたみたいだね。」

実にさわやかな顔をした剛士がそう言った。

「まさか、いまのは剛士くんなの?あなた、いったい何者?」

裕美がそうたずねる。

「ああ、そつだよ。さっきの光の弾丸やあの場から消えたのは僕がやったことだ。それで、僕は」

剛士はそこでいったん言葉を切ると、こう言った。

「僕は、魔法使いだ。」

## 第2章 3：謎の転校生現る（後書き）

転校生、剛士は魔法使いだった？

いったいどういふことなのか？

そしてまんまと逃げられた【S・A・L】の連中はどんな手を打ってくるか？

## 第2章 4：襲撃

「僕は、魔法使いだ。」

いきなりそう言った剛士に、裕美、亮平、そして目を覚ました裕太も目が点になっていた。

「魔法使いって……ファンタジーの世界じゃあるまいし……」

裕美がそう言うと、

「それは君たち双子も人のことは言えないんじゃないかな？君たちだって超能力者なんだろう？」

剛士がそう反論した。

「な、なんで知ってるの？」

裕美は動揺で声が上がっている。

「言っただろ？僕は魔法使いだって。そのくらい見破るのは簡単だ。だけど、別にそれでどうこうする気は無いよ。」

剛士は笑みを浮かべながらそう言った。

「そっか。剛士さんのほうは秘密にしたことなの？」

裕美がたずねると、

「特に秘密って言うことはないけど、話したからって誰も信じないと思うんだよね。」

剛士は相変わらず笑みを浮かべながらそう話す。

「たしかに、そりゃあそっだよな。超能力ですらもう信じる人なんかいないのに、魔法使いが現代に存在するなんて信じるほうがおかしいよな。」

それまで黙っていた裕太が口を挟んだ。

「まあ、そろそろ日も暮れるし、帰ろうか。」

その後もしばらく剛士と話した後、日が暮れてきたので、それぞれの家へ向けて歩き出したのだった。



裕太たちは帰宅し、夕飯を済ませた後、2階にある自分たちの部屋でくつろいでいた。と、そのとき。

「きゃあああああ!？」

1階から悲鳴のようなものが聞こえてきた。

「なんだ？」

裕太たちが階段を下りていくと、数人の男が侵入し、恵美を口で縛り上げ、連れ去ろうとしているところだった。

「お前ら、いったいなんなんだ!？母さんに何してんだよ!」

裕太が叫ぶと、

「我々は【S・A】の強襲部隊、《チーム・スピード》。《チーム・クローバー》の失敗により少し強引な手段をとらせてもらうことにした。この人は人質にさせてもらう。取り戻したくば我らの仲間になれ。本部で待っているぞ。」

《チーム・スピード》と名乗った連中は、そう言つと恵美を車に押し込み、走り去った。

「くそ、やっかいなことになったな……」

「うん……どうしよう?」

裕太も裕美も大きなため息をつきながらそうつぶやくのだった。

翌日、思い悩んだ裕太たちは、そろって学校を休んだ。

「とりあえず、行くしかないよな?やつらの本部とやらに。明日の朝早く出発しよう。」

裕太がそう裕美に言つと、

「そうだね。こうなつたらもう相手を壊滅させてやろうよ。」

裕美が少し物騒なことを口にする。どうやらやはり仲間になるという選択肢はないようだ。

「ああ、それはオレも賛成なんだが……オレたちの能力で立ち向かえるだろうか?」

裕太が客観的に自分たちの能力を考えてみると、使えそうなのは

サイコネシスだけなので、そう裕美に言ってみる。

「たしかに壊滅させようと言って見たはいいけどきついよね……」  
裕美も問題点に気づいて再び大きなため息をつく。

「どうしたものかな……昨日のクイーンとかいう幹部だけでもてこずりそうなのに……」

裕太もやはり昨日のことを思い出してため息をつく。

「あつ！ 剛士くんは？ 魔法使いだって言ってたし、協力してくれないかな？」

裕美が思い出したようにそう裕太に言う。

「ああ、でもオレたちの問題に巻き込むわけには行かないだろう。いざとなったら能力よりもケンカで戦うのもありかもな。」

裕太がそう言い、何か武器に使えるそうなものがないか探しに行き、裕美は携帯を取り出すと誰かにメールを送ったのだった。

翌朝。

「よし、行くか。」

裕太がそう裕美に言って玄関のドアを開けた、そのとき。

「やあ、話は裕美ちゃんから聞かせてもらったよ。僕も喜んで協力しよう。」

玄関の前で待っていたのは剛士だった。

「ありがとう、剛士くん。あのメールだけで察してくれるなんて……」

裕美が笑顔でそう言った。

「剛士、いいのか？ これはオレたちの家の問題だから、剛士に協力する義理なんて無いんだぜ。」

裕太が確認する。

「同じように不思議なチカラを持つもの同士、僕は協力を惜しまないよ。」

剛士はいつものように笑みを浮かべながら言った。

「ありがとう、剛士。それじゃ、行こう！」

## 第2章 5：救出作戦その1（vs〈チーム・クローバー〉）

「よし、行こう！」

裕太はそう言っただアノブに手をかけたが、その状態のまま動きが止まった。

「どうしたの？」

裕美がたずねると、

「いや、敵の本部ってどこだっけ？」

裕太のその言葉に、裕美も剛士もそろってずっこけた。

「そっぴゃわからぬね。でも、僕らにはそんなこと問題ではないね。」

剛士が立ち上がりながらそう言っただと思っただら、次の瞬間には小菅家の玄関先から3人の姿が消えていた。

「ここが敵の本部なのか？」

裕太が建物の入り口の様子を見ながらそう言っただ。

「おそらくそうだろうね。こないだ学校の前で待っていた黒塗りの車があそこにあるし。」

剛士が指差したほうを見ると、確かに裕太たちを待ち伏せして説得しようとしていた《チーム・クローバー》の乗っていた車があった。

「さて、どうやって中に入る？ できるだけ母さんを助けるだけにしたいが、どうやらこの中にはレポートできないみたいだ。かといって見張りに見つければオレたちが仲間になるために来たわけじゃないとばれて最悪幹部とかいう連中が出てくる可能性もある。」

裕太が見張りの動きを見ながらそう二人にたずねる。

「だったら……人払いをしまえばいいね。」

剛士はそう言っただ、手のひらに黒っぽい弾丸を発生させ、車のほうへ投げつけた。黒い弾丸は車に当たった直後に大きく膨れ上がり、

車をぺしゃんこにつぶし、大破させた。

「な、何事だ！」

突然車が大破したように見えた入り口の見張りはすぐに数人の仲間を連れて車のほうへ向かった。

「いまだ！行こう！」

入り口から人がいなくなったのを確認すると、裕太たち3人は建物の中へ潜入した。

「ところで、さっきの黒いのはなんだったの？」

裕美が走りながら剛士にたずねる。

「ああ、あれは当たったものの周囲だけ重力を100倍にする魔法だ。さっきは車に当たったから、車の周りだけ通常の100倍の重力負荷がかかってつぶれたってわけだ。ちなみに、不用意に近づくと人も関係なしに飲み込むから、きつと今ごろは……」

剛士がそういった直後、外から悲鳴のようなものが聞こえてきた。

「……ほらね。」

剛士は走りながらもさわやかスマイルを崩さないでそう言った。

と、そのとき。

「侵入者を感じたから来てみれば、お前らか。」

3人の目の前に現れたのは、《チーム・クローバー》の面々だった。

「母さんを返してもらおう。」

裕太は一言そうつぶやいた。

「《スピード》の連中から話は聞いている。お前らが仲間になるのであれば返してやるとのことだが、その答えは？」

テンズがそうたずねる。

「答えは、もちろんノーだ。邪魔をするなら、ぶっ潰す！」

裕太がそう叫ぶ。

「我々は調査チームで、戦闘能力はほとんどない。だが、先へ進ませるわけにはいか……ぐはあ……」

テンズが言い切らないうちに、裕太たちがタツクルをかまし、残

りのメンバーがひるんだ隙に、3人はその場を駆け抜けた。

「結局こうなるのか。仕方ない、このまま突っ走ってここを壊滅させる。で、オレや裕美は剛士みたいに攻撃のための能力はほとんど持ってない。だから、協力してくれている剛士を頼るようで悪いんだが、オレや裕美がサイコネシスで相手の動きを止める。そこを攻撃してつぶしていく作戦で行こうと思うんだが、どうだろうか？」

3人は物陰に隠れつつ、裕太がそう剛士にたずねる。

「ああ、僕がかまわないよ。むしろその方が手っ取り早くていいね。さて、それじゃ、先へ進もうか。」

剛士はいつものスマイルから少しまじめな顔になって裕太たちにそう言うのだった。

第2章 5：救出作戦その1（vs《チーム・クローバー》）（後書き）

やはり剛士は強かった。入り口をあっさり突破し、ついでに《チーム・クローバー》をも難なく突破。

しかし、まだ奥にはクイーンをはじめとする幹部3人集、そして《チーム・スピード》もいる。さらに、まだ出てきてない戦力もきつというはず。

裕太たちは無事に母親を救出できるのか？

## 第2章 6：救出作戦その2（vs〈チーム・ハート〉）

《チーム・クローバー》をかわして奥へ進んだ裕太たちだが、  
「いたぞ！そつちだ、追えー！」

後ろから《クローバー》の残党に追いかけられていた。

「ちっ……走ってる状態じゃ<sup>サイコキネシス</sup>能力で退治することもできないし、か  
といて止まれば集中する前に追いつかれる……どうすっかな……」  
裕太が走りながらぼやく。

（裕太、一人であいつらの後ろにテレポートして。私たちがあいつ  
らを引き付けるから、そこをサイコキネシスで動きを封じちゃえば、  
あとは楽勝よ。）

裕美が隣からそうテレパシーで話しかける。

（了解、つと……）

裕太はそう言うのと、追っ手の後ろへ移動し、後ろからサイコキネ  
シスを使って追っ手を足止めた。

「裕太くん、さっきのアレやるから巻き込まれないようにこっちへ  
戻って！」

剛士は手のひらに入り口で使った黒い弾丸を生成しながら裕太に  
そう指示する。

「わかった！」

裕太はそう言うのと、能力を解除し元の位置へ戻った。動けるよう  
になった追っ手は再び裕太たちへ向けて走ってくるが、

「そこまでだね。」

剛士は短くそう言うのと、手のひらの黒い弾丸を追っ手の中央めが  
けて放った。黒い弾丸は追っ手をまとめて飲み込み、悲鳴さえもか  
き消して押しつぶした。

「さあ、先へ進もうか。」

剛士がそう言うって前を向いた直後、剛士の顔を何かがかすめて通  
り過ぎた。

「ちえっ、かすっただけか。かすっただけじゃほとんど効果はないわね。」

何者かの声が聞こえた。

「誰だ！」

裕太が暗闇に包まれたこの先の通路をにらみながらそう叫ぶ。すると、暗い通路から3人の女性が出てきた。

「私たちは【S・A】の戦闘補助、《チーム・ハート》。補助担当とはいえなめてかかると痛い目みるわよ。」

《チーム・ハート》と一人が名乗ると、残りの二人がなぜかポーズを決めていた。

「バカはほうつといて、先へ進もうぜ。」

裕太が《チーム・ハート》を無視して先へ進もうとしたが、その後、腕にわずかな痛みが走った。

「な、なんだ？」

裕太が痛みを感じた腕を見ると、小さな注射針のようなものが刺さっていて、血液が少しずつ抜き取られていた。

「ふふふ……その注射針は特殊なもので、刺した相手の血液を奪うことで特殊能力を封じる効果があるのよ。」

一人がそう言っている間にも、裕太の血液がどんどん注射器の中へ流れ込んでいく。裕太が針を抜こうとしてもびくともしなかった。

「それだけ抜けばもう能力は使えないわね。」

そう言うと同時に、裕太の腕の注射針が抜け、空中で消えた。

「これで私たちを戦闘不能にしない限りあなたの特殊能力は戻らないわ。後の二人も同じようにしてあげるわ。食らいなさい！」

3人同時に注射針を何本も裕美と剛士に向けて投げてきた。

「こんなもの、僕には通用しない。」

剛士は自分に到達する前に先ほどから使いまくっている重力の弾丸で破壊し、

「私だって、破壊はできなくてもよけることくらい簡単よ！」

裕美はサイコキネシスで注射針の軌道を曲げ、《チーム・ハート



《のほうへ向けて返した。

「うわきゃー！ー！」

自分たちの技をそのまま跳ね返されたかたちになった《チーム・ハート》の面々は、奇妙な叫び声を上げながら逃げようとしたようだが、裕美が自由自在に進路を曲げ、最終的に3人全員の頸動脈付近に針を刺した。

「うきゃー……」

3人は最後まで妙な叫び声をあげると、その場に倒れた。

「ん……相手を倒したことだし、どうやら能力が戻ったかな。先へ進もうぜ。」

裕太の能力も無事に戻り、3人は再び先へ進み始めるのだった。

第2章 6：救出作戦その2（vs〈チーム・ハート〉）（後書き）

新たに登場した部隊もあっさり退け先に進む3人。

そろそろ幹部が出てくるころか？

## 第2章 7：救出作戦その3（vsへチーム・ダイヤ）&ジャック）

《チーム・ハート》を退け、先へ進んだ3人は、通路の分かれ道にいた。

「分かれ道か……どっちだろうな？母さんが捕まってる場所は……」  
裕太が通路の先をそれぞれ見てみるが、通路はそれぞれすぐに曲がり角になっているせいで先を見ることはできなかった。

「ねえ、明らかに怪しい看板がここにあるんだけど。」

裕美が何かに気づいて二人に声をかける。裕太たちもその看板とやらを見てみると、

「なにになに……右 コードネーム「J」の部屋、左 コードネーム

「A」の部屋……？なんのこっちゃ？」

裕太が看板に書かれていることを読んでみる。

「どっちへ行っても敵が待ち構えているってことだね。それで、おそらくそのコードネームってのは、今まで出てきた敵の名前から推測すると、「J」ってのはランプのジャック、「A」ってのはエースを示しているんじゃないかな？」

剛士がここまでに出てきた敵の名前からそう推理した。

「なるほどね。それで、どっちがいいかな？」

裕美が剛士にそうたずねる。

「きつと両方とも強いことに変わりはないだろうけど、なんとなくエースの方が強いってイメージあるし、ジャックの方 右へ進もう。」

剛士はそう判断し、3人は右の通路に入ってしまった。

しばらく歩いていくと、通路の先にドアのようなものが見えてきた。

「なんか部屋があるな。あれがさっき看板にあったコードネーム「J」の部屋か？」

裕太がそう二人に話しかけると、

「たぶんそうだと思う。でもってなんかドアの前にいるね……」  
裕美がそう言ったとおり、ドアの前では数人の男が待ち構えていた。

「ふむ、ここまでたどり着いたか。《スペード》の連中から話は聞いている。仲間になるのを断ったらしいな。とりあえず倒せとの指令も来てるし、覚悟してもらおうか。」

数人の男の中から一人出てきてそう言った。

「お前たちはなんなんだ？」

裕太がそうたずねると、

「オレたちは幹部3人集の直属の部下で、4つのチームのうち一番戦闘に特化した《チーム・ダイヤ》だ。4つのチームの中でただひとつ、幹部以外で特殊能力を使いこなしているチームさ。さあ、覚悟してもらおうか？」

リーダーっぽい男がそう言うと、壁が左右に広がり、ちょっと広めのフィールドが出来上がった。

「さあ、行くぞ！食らえ、サンダークラッシュャー！！」

リーダーがそう叫ぶと、手から雷が放たれ、裕太たちに襲いかかった。

「うわああああ！！」

「きゃああああ！！」

剛士はうまくかわしたが、裕太と裕美が直撃してしまい、バチバチともものすごい音がした。

「二人とも、大丈夫？」

剛士がそう声をかけると、

「な、なんとか……」

二人はふらふらと立ち上がったが、今で痺れたのか、ほとんど身体が動いていなかった。

「二人とも、無理はしないでいいよ。ここは僕が片付ける。悪いけどさっさと決めさせてもらおうよ。」

剛士はそう言うと、ここに来てから何発目かわからないが、重力の弾丸を作り、さらに今回はそれに何かを混ぜ込んだのか、黒い弾丸の周りになにやらピンク色の霧のようなものが回っていた。

「そっちが技の名前を叫ぶなら、僕だって！行くよ、スリーピンググラビティ！」

剛士がそう叫びながら作り出した弾丸を放つ。すると、黒い重力の弾丸より先に周りを回っていたピンクの霧が《チーム・ダイヤ》を覆いつくし、彼らは技名のとおりに眠ったらしく、その場に崩れ落ちた。そこに後から飛んできた重力の弾丸が炸裂し、《チーム・ダイヤ》は全滅した。

「よし、先へ進もう。」

剛士は裕太たちの身体を支えながら、ドアへ向かって歩き出した。ドアにつくころには裕太たちの身体の自由も戻り、3人は警戒しつつドアを開けた。と、開けた直後に弾丸のようなものが3人を直撃し、3人まとめて吹っ飛ばされた。

「いてて……な、なんだってんだ……」

裕太が起き上がると、今自分たちが開けたドアから大きなロボットが出てきた。

「な、なんだありや!?!」

裕太が驚いてると、ロボットの右腕がロケットパンチとして発射された。どうやら左腕の部分が無いところを見るとさっきのは左腕のロケットパンチだったらしい。

「あぶねえ!!」

裕太は自分の力を振り絞り、二人をつかんで短い距離だがテレポルトをしてパンチをかわした。

「ふっ、今のをかわしたか。なかなかやるな。だが、君たちもここまでだ。このジャックがいる限り先には進めない。あきらめて我々【S・A・】の仲間になればこれ以上の攻撃はしない。さあ、決断のときだ。」

やはり剛士の推測は当たっていたのか、ロボットに乗った男はジ

ヤックと名乗り、仲間になれとの要求をつきつけてきた。

「ふん、そんなものに従うわけないだろ！お前を倒して先へ進む！行くぞ！」

第2章 7：救出作戦その3（vsへチーム・ダイヤ）&ジャック（後書き）

ついに現れた幹部。ってロボットに乗ってるんかい!?

裕太たちはどう戦うのか？

## 第2章 8：救出作戦その4（ついに最奥部の部屋へ）

「あくまで仲間になることを拒むか。まあ、このロボット使いのジャックを倒さなければ先へ進むことはできない。今のうちに仲間になつておけばよかつたと後悔させてやるよ。」

ジャックはそう言うのと、戻ってきていたロケットパンチを再び放つた。

「もうその攻撃は通じないぜ。自分の攻撃で自滅しな！」

裕太はサイコネシスでロケットパンチの動きを止め、ジャックに向けて跳ね返した。

「ぬん！」

ジャックはあわてることなく、跳ね返ってきたロボットの右腕を強引につかみ、再び装着した。

「いまだ、食らえ！サンダーボール！」

剛士が手に雷の球を発生させ、ジャックに投げつけた。

「がああああ！？」

機械製のロボットは電気を通しやすい。ジャックは見事に感電し、ロボットも動かなくなった。

「よし、先へ進もうか。」

剛士がそう言うつてびくびく痙攣しているジャックの横を通り過ぎようとしたとき。

「ま、まだだ……まだオレは負けてないぞ！」

まだ寝転がったまま、ジャックは剛士の足をつかみ、裕太たちのほうへ強引に放り投げた。無抵抗に投げられた剛士はもちろん、突然前から剛士がぶつ飛んできた裕太たちもなすすべなく吹っ飛ばされた。

「ぜー、はー、オレの相棒のロボットを壊すとはお前たちの力を見くびっていたようだな。だが、オレはロボットなしでも十分体術だけでお前らごとき倒せるさ。さあ、第2ラウンドの開始だ！」



ジャックは立ち上がると、そう叫び3人に襲いかかった。それに  
対し裕太たちは…

「ふん、どうやらロボットを破壊されて周りが見えなくなったよう  
だな。オレたちは別にお前に合わせて体術で戦う必要なんて無いん  
だ。格闘バカほどこういうのには弱いだろ。」

裕太はジャックの行動を鼻で笑うと、右手をかざしてサイコキネ  
シスを発動させ、ジャックの動きを止めた。しかし、

「こいつ、思ったよりも重い!? オレ一人の能力じゃ動かせねえ!  
裕美、お前も協力してくれ!」

そのまま壁に弾き飛ばそうと思ったようだが、ジャックの身体が  
思ったより重く、押さえつけるのがやっとだった。

「うん、わかった!」

裕美はそう言うのと、自分も右手をかざしてサイコキネシスを発動  
させ、ジャックを壁に弾き飛ばし、壁にめり込ませたところでジャ  
ックは気絶したようだ。

「それじゃ、今度こそ先へ進もう。」

裕太がそう言うって、3人はジャックの部屋を出てさらに奥へと進  
んだ。

「お、どうやら次が最後の部屋みたいだね。キングの部屋って書い  
た扉が遠くに見える。」

剛士が遠くに扉が見えたのを確認するとそう裕太たちに話す。

「やっと着いたね。母さん、大丈夫かな?」

裕美が恵美を心配してそう裕太にたずねる。

「昔このグループの一員だった母さんにそんな手荒なマネはしない  
だろうが、早いとこ助け出してやらないとな。」

裕太はそうつぶやき、3人は扉の前についた。

「あれ? そういえば、こないだの《チーム・スピード》とか幹部の  
クイーンってやつ、いなかったな。……まあ、いいか。戦わないこ

とに越したことはないしな。」

裕太がそんなことに気づき、つぶやいたものの、どうでもいいことにも気づいたらしく、そのまま扉を開けた。

開けて中を見た瞬間、3人は驚きのあまり「あっ」と声をあげた。

部屋の奥にある大きなイスにはなぜかクイーンが座っており、その足元には見たこと無いオッサンが転がっていた。そして部屋の片隅にある鉄格子で覆われた部分に恵美はいた。

「裕太、裕美！気をつけて！そこにいる性悪女、キングを倒して自らグループのリーダーになったのよ！」

恵美がそう鉄格子に手をかけて叫ぶ。

「うるさいわよ、そこ。私はあなたみたいな古い人間を組織に戻すこと自体反対だったのよ。それをいつまでもこだわってるキングに嫌気が差したから私の能力で倒したのよ。もうキングは立ち上がることさえできないはずよ。さあ、せつかく人質を助けるためにここまで来たようだけど、正直人質なんてどうでもいいのよね。」

クイーンはそう話す。

「じゃあ、即刻母さんを解放してもうオレたちにかかわらないでくれよ。」

裕太がそうクイーンに要求する。

「でも、ここまで知ったあなたたちは無傷じゃ帰さないわ。ていうかむしろ口封じのために死んでもらうわ！覚悟しなさい！」

クイーンがそう叫んだ、そのとき。

「クイーン、貴様裏切りおったな……！」

ドアを開けて飛び込んできたのは、着物を着て腰に刀のようなものを下げた男だった。

「あら、エースじゃないの。そうね、あなたはキングに心酔していたものね。でも、裏切ったわけじゃないわ。私はこの【S・A】をよりよくするためにキングからトップの座を奪い取っただけよ。」

邪魔するならあんたから始末する！」

クイーンは男をエースと呼んでそう話し、臨戦態勢をとる。

「ふん、幹部最強と言われたこのエースの力、忘れたわけではあるまい？貴様にこの組織は任せられん！成敗してくれる！」

エースもまた腰に下げた刀を抜き、構えた。

「あれ……オレたち忘れられてないか？」

第2章 8：救出作戦その4（ついに最奥部の部屋へ）（後書き）

なんとグループの幹部の一人、クイーンがクーデターを起こしキングを倒した！？

そして裕太たちが戦闘を避けたエース乱入、ここにクイーンvsエースの対決が始まるうとしていた。

って、裕太たちは？

第2章 9：救出作戦その5（vsクイーン）（前書き）

また1日空いてしまいました、ごめんなさい（汗

## 第2章 9：救出作戦その5（vsクイーン）

「貴様なんぞに【S・A】は任せられぬ！今ここで我が成敗してくれる！」

エースがそう叫びクイーンとの間合いを詰めようとする。

「おいおい、待てよ！オレたちを忘れるんじゃない！」

裕太がそこに口を挟む。

「おぬしら何者だ？クイーンに味方するものなら容赦なく斬るぞ。」

エースは刀を構えた格好のままそう裕太たちに問う。

「いや、オレたちはキングによってさらわれた母さんを取り戻しに来たんだ。だから正確に言えばどっちの味方でもない。でも、エースって言ったな。あんたは母さん誘拐とは関係ないんだろ？」

裕太が説明した後逆にたずねる。

「ああ、我はそのような計画聞いておらぬし、興味も無い。どうやらクイーンを倒すという目的は同じようだな。どうだ？ここはひとつ共闘と行かぬか？」

エースがそう持ちかけてくる。

「ああ、いいぜ。見たところかなり強そうだし、こちらとしても無駄な戦いはしたくない。」

裕太がそう言って、裕太たち3人とエースはがっちり握手した。

「そろそろ話はまとまったかしら？」

あくびをしながら裕太たちの話を聞いていたクイーンがそうたずねる。

「ずいぶん余裕だね。4対1になるのに。」

剛士がクイーンに自分たちの数の上での有利を告げると、

「そんなもの、私にはハンデにもならないわ。覚悟はいいかしら？」  
クイーンが相変わらず余裕の笑みを浮かべて言うてくる。

「行くぞ！一撃で決める！食らえええ！」

エースが叫び、刀を振るう。すると切っ先から衝撃波が放たれ、クイーンに向かっていく。

「ふん、この程度？よくそれで幹部最強を名乗っていたわね。」

そう言っただけ避けたようにするが、そこに、

「逃がすかよ！裕美！」「うん！」

裕太と裕美のサイコキネシスが発動し、クイーンを押さえつけ、エースの衝撃波が直撃した。

「それじゃ、僕も。グラビティクラッシュ！」

剛士は幾度となく使ってきた重力の弾丸を作り出し、衝撃波を食らって吹っ飛んだ状態のクイーンに投げつけた。

空中で弾丸を受けたクイーンは重力の効果で床に叩きつけられ、

「かふっ」という声をあげたが、すぐに立ち上がった。

「おのれ……私をここまで追い詰めるとはな……進化した私の能力を見せてやるわ！」

クイーンがそう言っただけで懐から何かのスイッチを取り出すと、裕太たちとクイーンを取り囲むように鉄格子が出現した。

「その鉄格子、半分を境目に、あなたたち側に触れると高圧電流が流れるだけでなく、私の能力で体力を吸い取られるわ。おそらく一度食らったら電流のダメージもあるから立ち上がることはできないでしょうね。そして半分から私のほうは高圧電流のみ。一種の金網デスマッチってヤツね。だいぶ前から改造を進めておいたのが役に立ったわ。元はキングを倒すために作ったものだけど、キングが弱すぎて使う必要もなかったのよね。」

クイーンはそう説明した。

「そのどこが能力の進化なのだ？真の進化とは、このことを言うのだ！」

エースはそう叫ぶと、さっきと同じように刀を振るい、衝撃波を発生させた。しかし、今度はすぐに衝撃波が見えなくなった。

「あんたこそどこが進化なの……きゃあああ！」

クイーンはそう言いかけたとき、目の前にさっきの衝撃波が出現

し、直撃、吹っ飛んだもののわずかに鉄格子には届かなかった。

「これぞわが能力、斬撃空間超越能力。」

「エースが一度刀を鞘に納めながらそうつぶやいた。

「な、ならば……これでどうかしら？」

またクイーンが何かのスイッチを押すと、床が動き始めた。裕太、裕美、エースは安全地帯があるのを発見し、そこに移動して助かったものの、剛士が移動するときには足がもつれて転んでしまい、裕太のサイコキネシスも間に合わず鉄格子にぶつかってしまった。

「ぐああああー！」

電流のダメージで叫ぶ剛士だが、すぐに気絶したのかぐったりしてしまった。

「剛士！くそ、さっさとくたばれや、この年増女！」

裕太が怒りに任せてサイコキネシスを放ちクイーンを捕らえようとすると、怒りでコントロールが定まらず、うまくクイーンの動きをとめることができないでいた。

「今一度わが斬撃を食らうがいい！」

エースは再び刀を抜き、思いっきり振るった。斬撃は再び空間を超え、クイーンに直撃……かと思われたが、

「私はこつちよ？どこを狙っているの？」

クイーンは斬撃出現地点を予測し、移動していた。

「もとよりそのようなことも予測済み。今の攻撃で我が狙ったのは貴様にあらず、そのリモコンだ。」

エースがそう宣言したとおり、斬撃が空間を超えて現れた地点では、鉄格子を動かしていたリモコンが真つ二つになっていた。

「バカな、なぜあそこに置いてあると見抜いたんだ？」

クイーンが動揺してたずねる。

「それはキング様にさえ言っていなかったもうひとつの能力、心眼。これによって我は貴様の裏切りも予測してここに駆けつけたのよ。」

エースがそう言ったところで、リモコンが壊れたことにより鉄格子はその効果をなくし、現れたときの状態と逆回して戻っていきか



けたが、うまくいかずそのまま倒れた。

「とりあえずこれで鉄格子デスマッチは終わりだな。さあ、決着をつけようぜ、クイーン！」

第2章 9：救出作戦その5（vsクイーン）（後書き）

さあ、クイーンの仕掛けた鉄格子デスマッチは破ったぞ！  
次回、いよいよ決着！

第2章 10：救出作戦その6（決着）（前書き）

まず、お詫びです。

3日も間を空けてしまいすいませんでした。

## 第2章 10：救出作戦その6（決着）

「さて、そろそろ決着つけようではないか、クイーン！」

エースがそう叫び、刀を構えて衝撃波を放つ。

「もうその技は効かないわ！」

クイーンはそう言うと、右手を前に突き出し、手から黒い弾丸を放った。黒い弾丸はエースの衝撃波をかき消し、3人の方へ一直線に向かってきた。

3人はうまくかわしたが、黒い弾丸が直撃した部屋の壁が大きく陥没していた。

「これは……剛士の使う重力の魔法じゃないか？何でアイツが使えてるんだよ……」

裕太が陥没した壁を見てそうつぶやく。

「うふふふ……それはね、あの金網……じゃない、鉄格子デスマッチに秘密があったのよ。あれで電流を食らうと体力を吸い取られるって言ったでしょ？そのときに、一緒にその人の特殊攻撃もコピーできるっていう仕掛けも施されたのよ。もう壊れたから今の重力の弾丸以外は使えないけどそれでも十分よ。」

クイーンは丁寧にもそう説明した。

「ふん、もう他の技が使えないというのなら重力弾だけ気をつければ楽勝だな。さっさとくたばれい！」

エースが今度は消える斬撃で攻撃する。しかし、

「あんたたちこそ重力の弾丸に潰されてしまいなさい！」

クイーンは完全にエースの斬撃出現地点を先読みして攻撃をかわすと、重力弾をあたりかまわず放ち始めた。

裕太たちがかわし続けると、クイーンがイラついてきたのかコントロールが乱れ始め、恵美の捕らえられている鉄格子を破壊し、さらには天井さえもぶち破り屋根に大きな穴が開いた。どうやら天気はいつのまにか雨が降っていたらしく、屋根に開いた穴から雨が入

ってきた。

「母さん、大丈夫か!？」

裕太と裕美が壊れた鉄格子に駆け寄りそつたずねる。

「ええ、大丈夫よ。で、あの人どうする?このままじゃこの建物ごと破壊しかねないわよ。」

恵美がクイーンのほうを見てそう裕太たちにたずねる。

「元々目的は母さんの救出だけだったからこれで達成したし、ここが壊れようと関係ない。帰ろうぜ。」

裕太がそう言い、裕太が剛士を背負い、裕美が恵美に肩を貸して撤退しようとしたとき。

「待ちなさい。ここから無事に帰れると思ってるの?」

クイーンがコントロールを取り戻したのか、裕太たちの足元に重力弾を撃ちこんで来た。

「くっ……あれ、エースさんは?」

裕太がいったん剛士を下ろし、共に闘っていたエースを探してみると、床に倒れていた。

「幹部最強の私としたことがドジを踏んだものだ……一瞬のスキをつかれ重力弾をまともに食らってしまったとはな……まだ少しなら闘える。この場は私が引き受けよう。だからおぬしらは早く脱出するのだ。行け!」

エースは気力で立ち上がると、裕太たちをすでに壊れたドアの向こうへ突き飛ばし、壊れかけの壁を斬って瓦礫の山と変え、自らの退路を断つと同時に、裕太たちの逃げる時間を確保することに成功した。

「さあ、ラストバトルと行こうではないか、クイーン!」

エースが刀を下段に構えてそう言い、クイーンも元々キングのイースがあつた少し高い場所で両手に重力弾を作り出し投げる態勢をとった。

と、そのとき。空が激しく光り、耳をつんざくような音があたりを響き渡った。まだ逃げていなかった裕太たちが瓦礫の隙間から様

子を見てみると、エースは呆然と立ち尽くし、その視線の先ではク  
イーンが倒れていた。

「まさか、落雷？」

裕美が今の音と現状を照らし合わせてそうつぶやいた。

そう、クイーンが少し高いところにいたのと、先ほど開いた穴か  
ら入ってきた雨に濡れていたこと、そして屋根の穴に雷が落ち、そ  
の真下にいたことなどの偶然が重なり、クイーンは超高压電流を食  
らって倒れたのだった。

「とりあえず、まだ生きてるようだし、救急車くらいは呼んでおい  
てやるか。」

裕太は携帯電話で救急車を呼ぶと、裕美や剛士、恵美とともに【  
S・A】の本部を後にしたのだった。

第2章 10：救出作戦その6（決着）（後書き）

やっと【S・A】に決着をつけた裕太たち。

次回、エピソードで最終回です。

本当は第3章を書くのかなとか考えていたんですが、2章でグダグダになってしまったのでキリのいいところでやめておきます（笑

## 終章：エピソード（前書き）

元の平和な生活に戻った裕太たちに衝撃の知らせが届く



## 終章：エピローグ

裕太たちが【S・A・】を壊滅させてから数日後

「えっ！？ 転校ってマジかよ？」

裕太が剛士にそうたずねていた。

「ああ、本当だよ。君たちだから話せることだけど、表向きは父親の転勤、でも本当の理由は僕の能力にあるんだ。【S・A・】は壊滅したとはいえまだほかに怪しい組織はいくらでもある。そいつらが僕を狙って襲ってくるかもしれないからね。みんなに迷惑はかけられないよ。だから、また別の土地へ引っ越すんだ。何もなければ僕も静かに暮らせるんだけどね……」

剛士は苦笑いを浮かべながらそう言った。

「そっか。寂しくなるけど、元気だな。」

裕太は剛士にそう言って、がっちりと握手を交わした。

「剛士くん、なんかあつという間だったけど楽しかったよ。元気でね。」

裕美もそう言って剛士と握手をして、剛士は裕太たちの前から姿を消した。

そして、数ヶ月のときが流れた

「裕太！早く起きて！！遅刻しちゃうよ！！」

前とは逆で裕美が裕太を起こしている。

「寒くて布団から出たくない……………学校かつたるい……………」

裕太はそう言っただけで布団の奥へもぐりこんでいった。

「ゆ・う・た？早く起きないとどうなっても知らないわよ！」

裕美が半ギレ状態でそう叫ぶ。

「……………」

裕太はとことん無視。

「そんなに布団から出たくないならそのまま一生布団に入ってなさい！」

裕美はついに完全にキレたのか、サイコキネシスで裕太の布団を縛り上げ、そのままベッドに転がすと、部屋を出て一人でレポートして学校に向かうのだった。

一方、裕太は

「裕美くオレが悪かったよ……………これ何とかしてくれ……………」

布団の中でぼやいてみるが、すでに反応がないことを悟り、とりあえずレポートで脱出し、着替えるとすでに遅刻ながら学校へレポートするのだった。

そのころ、先に行った裕美は

「裕美ちゃん、どうしたの？なんか怖いし、それにいつも一緒の裕太くん、今日はいないけどケンカでもしたの？」

秋子がそう裕美にたずねる。

「えっ？そんなに怖い顔してた？朝ちよつと裕太とケンカみたいなことになっちゃってね……裕太があまりに起きないから怒ってそのまま飛び出してきちゃったの。」

裕美は朝の一件を自分たちの超能力はうまく伏せて話した。と、そこに遅刻してきた裕太が教室に入ってくる。

（あ、やっときた。よくあれ脱出できたね。）

裕美がテレパシーで裕太に話しかける。

（まったく、苦労したぜ。いくら跳ね除けようとしてもまとわりついてくるんだから。結局テレポートで脱出するハメになったぜ。）

裕太が愚痴をこぼす。

（でも、裕太が起きないのが悪いんだからね。）

裕美はそう裕太を責める。

「裕美、今朝は悪かった。ちよつと悪ノリが過ぎたな。」

そこで裕太が口に出して裕美に謝った。

「わかってくれたんならもういいよ。」

裕美もあっさり裕太を許し、ちよつとそこに同じく寝坊かなにかで朝のHRにいなかった亮平もやってきて、いつもの4人で和気あいあいと休み時間を過ごすのだった。

完

## 終章：エピソード（後書き）

なんかかなりはちゃめちゃなストーリーになりましたがこれにて完結となります。

厳しい意見でもつまらない作品だったとしても、どんな意見でもかまわないので感想などできれば書き込んでくださると幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1552b/>

---

ツイン・オブ・エスパー

2010年10月8日15時42分発行